

愛知県立岩津高等学校

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における
学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する
実践研究（高等学校）

イメージ図



はじめに

「世界に対して胸を張って、日本の教育のこれはいいぞと言えるもの。まず一つは国民が教育を非常に重視している。第二に学習効率の高さ。三番目に先生の評価の高さ。四番目に人間形成をめざしている日本の教育。五番目に…」私が教員人生を歩むに大きな影響を受けた恩師の話です。昭和が突然の終わりを告げようとする頃でした。

時代は平成へと移り、国立青少年教育振興機構より、日本と米国・中国・韓国の普通科高校生の学習意識や学校生活の実態、及び将来の展望などを比較した「高校生の勉強と生活に関する意識調査報告書」が公開（平成 29 年 3 月）されました。

勉強の仕方について、「試験の前にまとめて勉強する」一夜漬けが多い。

勉強の時間も、学校の宿題とそれ以外の勉強（予習・復習）を「しない」が多い。

授業形態について、「教科書に従って、その内容を覚える授業」受け身的な授業が中心。

授業中の態度について、「きちんとノートをとる」が多く、発言やグループワークへの参加に消極的。「居眠り」も多い。

パソコンの利用、プログラミング、インターネットを利用して勉強することなど情報通信技術（ICT）の活用が少ない。

自然の中での体験活動、ボランティア活動、勤労体験活動、科学の実験や見学といった学習活動が少ない。また、これらの活動が好きだと回答した者も少ない。

人生目標について、多くの項目で肯定率が低く控えめな人生目標。

日本の特徴や課題を分析し、教育の向上に資する基礎データとして提示されたものです。七年前に行われた同様の調査との経年的な変化も比較されていました。

勉強の仕方について、「試験の前にまとめて勉強する」「問題意識を持ち、聞いたり調べたりする」「できるだけ自分で考えようとする」の割合が高くなっている。

授業形態について、生徒の発言やグループワークを重視する授業が多くなったと感じている。

先生の指導では、クラスのリーダーになることを重視するようになった。

人生目標として、「社会のために役立つ生き方をすること」の割合が年々高くなっている。

報告書は、高校生の勉強感が彼らの人生観にも色濃く反映しているようである、と結んでいます。

昭和から引き継いだ平成の教育も、ひと区切りを迎えようとしています。本校ではこの 2 年間、学力定着に課題を抱える学校現場として、各教科において主体的・対話的で深い学びに向けた研究に取り組んできました。教育活動全般においても共同学習の理解を通して、生徒の能動的な活動に向けた工夫をするなど、先生方の意識が高まっています。生徒もそれを敏感に感じているようであります。前述報告書のような詳細なデータはありませんが、日々の学校生活の中で子どもたちの変化を実感しています。不易流行を求め続ける先生方の研究心も、日本の教育の矜持の一つであります。

2018年2月2日

校長 平松 直哉

第一章 昨年度の課題と本年度の方向性

1 昨年度の課題

(1) 職員の取り組み

初年度に新しい学習指導要領に対応するための研究の柱として、授業などの学習活動に協同学習を取り入れた。南山大学石田裕久教授から職員研修を受けたり、協同学習における県外の先進的な取り組み校を視察したりして具体的な方法を探った。また、国語・数学・英語の3教科では、大学で授業方法の研究に携わる教授等に協力を仰ぎ、授業や指導案に細かいアドバイスを得ることができた。

しかし、校内研究委員として授業改善に取り組んだ教員が英数国各教科1名であったことから、1年を経ても教科内に大きく広がることがなかった。教科支援員の指導を得ることができなかった教科は尚更のことであった。

協同学習導入前の1学期と導入後の2学期に行った「生徒による授業評価」を分析すると、研究初年度ということもあり、①2学期から導入し始めた協同学習の浸透は僅かであり、②授業への興味・関心は微増であった。このことから、③2年目の取り組みに向けて内容や指導方法について改善が必要、という課題を残すことになった。



(2) 教科内の研究意識

3教科各1名の校内研究委員では、教科内の活性化に繋がらない現実があった。授業の工夫や改善における新鮮な発想や、授業実践における生徒の意外な反応などの情報交換が少なく、研究の広がりには欠けたことが大きな課題として残った。

(3) 生徒の主体性

各種コンテストへの挑戦や地域のボランティア活動など、対外的な活動に参加する機会を増やしたが、参加した生徒一人ひとりの意識に自己有用感と達成感が生まれたかどうかを計ることができなかった。また、生徒の対外的な活動に加え、学校生活の主を占める授業の場で自己の存在感と他者との共生を見つけ出し、自己実現を図りながら他者を理解する寛容の精神を育める指導方法を見つける必要があった。

2 本年度の方向性

教科会を主体とした研究意識の醸成を図り、引き続き本校の教育目標である「社会に貢献する人間の育成」を目指す。

(1) 最終報告会までの流れ

6月5日（月）～16日（金） 第1回校内公開授業週間
6月15日（木） 公開授業

9月～12月	県内・県外先進校訪問
11月6日(月)	文部科学省の研究視察
11月1日(水)～10(金)	第2回校内公開授業週間
12月中旬	生徒による授業評価
12月中旬	保護者による学校評価
2月2日(金)	最終報告会

(2) 実践研究推進委員の選出

研究支援委員	
・大学研究者	南山大学人文学部心理人間学科 教授 石田 裕久 様
・先進研究校	愛知県立加茂丘高等学校 教諭 鈴木 和浩 様
・助言者	愛知県教育委員会高等学校教育課 指導主事 伊藤 君江 様
授業支援委員	地域連携推進組織
<ul style="list-style-type: none"> ・教科支援員 <ul style="list-style-type: none"> 国語 愛知淑徳大学創造表現学部 教授 永井 聖剛 様 数学 愛知教育大学数学教育講座 准教授 青山 和裕 様 英語 日本福祉大学国際福祉開発学部 教授 米津 明彦 様 ・助言者 <ul style="list-style-type: none"> 愛知県教育委員会高等学校教育課 指導主事 伊藤 君江 様 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域連携アドバイザー <ul style="list-style-type: none"> 特定非営利活動法人 岡崎まち育てセンター・りた 事務局次長 三矢 勝司 様 ・地域連携(拠点) <ul style="list-style-type: none"> 岡崎市北部地域交流センター「なごみん」 センター長 牧野 和弘 様 ・地域連携(学校) <ul style="list-style-type: none"> 五校交流会 <ul style="list-style-type: none"> 愛知県立岡崎豊学校, 岡崎市立岩津中学校, 岡崎市立岩津小学校, 岡崎市立恵田小学校
学校評議員	
・岩津学区総代会長	時々輪忠正 様
・元県立高等学校長	吉野 功 様
・同窓会副会長	柴田 和子 様
・岡崎市立岩津中学校長	長坂 洋人 様
・PTA会長	早川 啓子 様

(3) 研究教科の拡大

昨年の3教科(国語・数学・英語)に加え, 地歴公民科と理科に取り組みを拡大した。また, 2年目になる本年度は3教科を2名に増やし, 新しく研究に携わる地歴公民科と理科の教員は各1名とした。

(4) 教科研修会と教科支援員との連携

各教科で中心となる校内の研究推進者を増員するとともに, 教科全体の取り組みに発展させるため, 教科ごとに研修会を実施して活性化を図ることとした。また, 教科支援員との連携を深める取り組みを行うこととした。

- ①教科支援員に教科会への参加を願い、全体に助言が得られるようにする。
- ②研究授業等では、教科支援員と事前に連絡を取り指導案の作成を行う。
- ③文部科学省訪問時の研究授業等の後に教科ごとの研修会を実施し、教科支援員から意見交換や助言が得られる機会を設ける。

3 校内研究行事と委員会等開催計画

	年月日 (曜)	授業支援委員会	校内研究行事	その他
1 学 期	平成 29 年 5 月上旬			職員会議 (本年度 の取組について) 教科会 (校内研究 員の選出)
	6 月 5 日 (月) ～16 日 (金)		第 1 回校内公開授業 週間	
	6 月 15 日 (木)		公開授業	
	6 月 21 日 (水)			学校評議委員会
	7 月中旬			生徒による授業評 価 (1 回目)
	8 月 21 日 (月)		第 1 回校内現職研修 (協同学習について)	
2 学 期	9 月上旬	第 1 回研究支援委員会		
	9 月上旬	授業支援委員会 (国・数・英)		先進校視察 (県外, 県内)
	10 月 12 日 (木)		第 2 回校内現職研修 (研究推進に向けて)	
	11 月 6 日 (月)	第 2 回研究支援委員会 授業支援委員会 (国・数・英・理・地公)		文科省視察
	11 月 1 日 (水) ～10 日 (金)		第 2 回校内公開授業 週間	
	12 月中旬			生徒による授業評 価 (2 回目) 保護者による学校 評価
3 学 期	2 月 2 日 (金)	第 3 回研究支援委員会	最終発表会	
	2 月 20 日 (火)			文科省実践報告 (東京)
	2 月中旬			学校評議委員会

第二章 研究 2 年目の取組

1 研究教科の拡大と担当者

学力向上推進委員		
	平成 28 年度	平成 29 年度
国語科	垣見優太	垣見優太 小野敬子
地歴公民科	****	前野亮太
数学科	岩田健明	大石 剛 岩田健明
理科	****	丹後麻衣
英語科	杉山美月	荻窪雄太 杉山美月

2 教科ごとの研修会実施状況

(1) 国語科

ア 第 1 回（高等学校初任者研修と合同開催）

①日時 平成 29 年 9 月 12 日（火）午前 10 時から午後 4 時まで

②場所 会議室・教室

③参加者 本校 3 名 校長，国語科 2 名（初任者，研究推進教諭）

来校者 愛知県立加茂丘高等学校長 河合龍二 様

愛知県立岡崎西高等学校教頭 加藤真理子 様

愛知淑徳大学創造表現学部教授 永井聖剛 様

平成 29 年度高等学校国語 C 班初任者 13 名

④内容 平成 29 年度高等学校国語 C 班初任者 13 名が来校し，研究授業と示範授

業を行った。第 4 限は本校初任者が研究授業を行い，第 5 限は昨年度から研究を推進している本校教諭が示範授業を行うことから，教科支援員である永井教授を招いて，研究授業と示範授業の振り返りと永井教授による協同学習のポイントについて助言を受けた。教科の指導校長であり，また，平成 26, 27 年度に同様の研究を行っていた愛知県立加茂丘高等学校長の提案を受けて実施した。



国語科初任者の研究協議会

イ 第 2 回

①日時 平成 29 年 9 月 15 日（金）午前 9 時 45 分から午前 11 時 30 分まで

②場所 会議室

③参加者 本校 国語科教諭 6 名

来校者 愛知淑徳大学創造表現学部教授 永井聖剛 様

愛知県教育委員会高等学校教育課指導主事 伊藤君江 様

- ④内容 昨年からの取り組みの振り返りを行うことと、12日に行われた研究授業や示範授業の改善点について協議を行った。

(2) 英語科

ア 第1回

①日時 平成29年9月15日(金) 午前10時45分から午後0時30分まで

②場所 会議室

③参加者 本校 英語科教諭6名

来校者 日本福祉大学国際福祉開発学部教授 米津明彦 様

愛知県教育委員会高等学校教育課指導主事 伊藤君江 様

- ④内容 京都市立堀川高等学校の視察報告を行った。また、昨年からの取り組みの振り返りと今後の方向性を検討した。

イ 第2回

①日時 平成29年11月6日(月) 午後1時30分から午後2時20分まで

②場所 各教室, 会議室

③参加者 本校 英語科教諭7名

来校者 日本福祉大学国際福祉開発学部教授 米津明彦 様

- ④内容 文部科学省の視察に合わせて実施した研究授業の後に教科会を実施, 教科支援員と意見交換を行った。

(3) 数学科

ア 第1回

①日時 平成29年10月5日(木) 午前8時45分から午前11時30分まで

②場所 会議室・教室

③参加者 本校 数学科教諭6名

来校者 愛知教育大学准教授 青山和裕 様

愛知県教育委員会高等学校教育課指導主事 伊藤君江 様

- ④内容 青山准教授と伊藤指導主事に授業参観を依頼し, その後の教科の研修会において, 昨年からの取り組みの振り返りを行い, 課題や疑問点を出し合いながら数学科全体として研究の方向性を検討した。

3 校内職員研修の実施

年度が替わり, 6名の転入者と3名の初任者を迎えることとなった。再任用教諭や臨時的任用教諭, 期限付教諭, 任期付任用教諭を含めると15名が新しく本校に勤めることになるため, 協同学習を導入した授業改善の方法等を学ぶ機会を設けた。

(1) 第1回校内研修

ア 日時 平成29年8月21日(月) 午後1時から午後4時30分まで

イ 場所 会議室

ウ 目的 協同学習の基本的理念と評価方法について理解を図る。

研究2年目の取り組みにおける方向性を確認し, 職員の共通理解を図る。

- エ 講師 南山大学人文学部心理人間学科教授 石田裕久 様
オ 内容 協同学習の概要について知る機会とした。(ワークショップを含む)
協同学習における評価方法の講義を受けた。

カ 参加者 28名

(2) 第2回校内研修

- ア 日時 平成29年10月12日(木) 午後2時から午後3時30分まで
イ 場所 会議室
ウ 目的 先行研究を行った学校の取り組みと成果を知ること、本校の研究に活かせる研修会とする。

エ 講師 愛知県立加茂丘高等学校
教諭 鈴木和浩 様

オ 内容 「主体的・対話的で深い学びを推進するために」と題した講義とグループワークを実施した。

カ 参加者 33名



第1回職員研修



第2回職員研修

4 研究先進校の視察

県内外で授業改善や主体的な学びに取り組んでいる学校を訪問することで新たな知見を得られるようにした。訪問者のみならず、教科内や他教科の教員に還元できるようにした。

(1) 県外視察

ア 平成29年9月12日(火)

広島県立可部高等学校 教諭2名(数学科・理科)

身近な話題や道具で、より意欲的な表現活動ができることを英語科2年生で実施している。化学では、身近なものを素材にした実験で実社会・実生活と化学の関連を伝える取り組みを実践している。

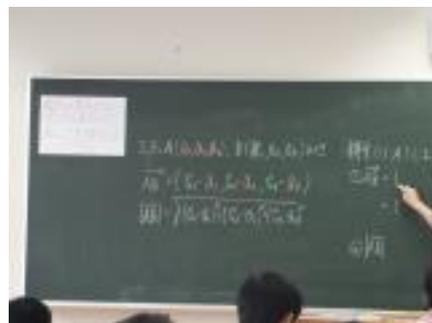
イ 平成29年9月14日(木)

京都市立堀川高等学校

教諭2名(英語科)

汎用性が高く、短時間で実施できるペアワ

ークからグループワーク・発表まで、多様な活動方法を普段の授業の中で計画



県外学校視察

的に取り入れている。生徒の学力レベルは高いが、学ぶところが多い。

ウ 平成 29 年 10 月 13 日（金）

岐阜県立岐山高等学校 教頭 1 名（数学科）

普通科の他に理数科が設けられており、理系に強い高校である。また、平成 22 年まで文部科学省からスーパーサイエンススクールの指定を受けていた。教育課程を組織的に営むカリキュラムマネジメントの第一人者である岐阜大学准教授田村知子氏が研究に加わり学校改革を行った。

エ 平成 29 年 10 月 30 日（月）

兵庫県立太子高等学校 教諭 2 名（地歴公民科・保健体育科）

総合学科の学校である。コミュニケーション能力を高め、社会に適応していく生徒を育てていくことを目標に、「つながり」を大切にしている。教員からの一方的な講義形式の授業ではなく、生徒どうしの関わりの中で、能動的な学習参加が実現されている。生徒たちは、書く・話す・発表するなどの言語活動を通して、「確かな学力」を身に付けている。

(2) 県内視察

ア 平成 29 年 11 月 14 日（火）

愛知県立加茂丘高等学校 教諭 2 名（国語科）

イ 平成 29 年 11 月 15 日（水）

同 教諭 2 名（数学科，英語科）

ウ 平成 29 年 11 月 14 日（火）

愛知県立小牧南高等学校 教諭 4 名（国語科，地歴公民科）

県立高等学校教育課程研究指定校事業中間発表会

エ 平成 29 年 11 月 15 日（水）

愛知県立幸田高等学校 教諭 1 名（数学科）

県立学校課題研究指定校事業（数学）中間発表会

(3) 視察の還元

視察後，研究推進のヒントとなる事項や本校への還元ポイントを簡潔に記載した報告書を作成し，共有データとして閲覧できるようにするとともに職員に配付した。

5 研究発表会への参加

(1) 全国学校体育研究大会和歌山大会

ア 期日 平成 29 年 11 月 9 日（木）～10 日（金）

イ 参加者 保健体育科 1 名

ウ 場所 和歌山県民文化会館，和歌山県立桐蔭高等学校

エ 主題 「主体的・対話的で深い学びを通して自ら考え工夫していく力を身に付ける体育・保健体育学習」～自らが進んで運動（遊び）に取り組み，仲間とともに高め合う姿を求めて～

(2) 全国高等学校国語教育研究大会兵庫大会

ア 期日 平成 29 年 11 月 16 日（木）～17 日（金）

- イ 参加者 国語科 2名
- ウ 場所 神戸芸術センター，神戸市立六甲アイランド高等学校，神戸山手女子高等学校
- エ 主題 「国語教師のアクティブ・ラーニング」ー主体的・対話的で深い学びの実現ー

(3) 全国英語教育研究大会（全英連新潟大会）

- ア 期日 平成 29 年 11 月 22 日(水)・23 日(木)
- イ 参加者 英語科 1名
- ウ 場所 りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館
- エ 主題 「新潟から世界へ！新潟から未来へ！」～交流・喜び・成長あふれる英語教育の推進～

6 教育カリキュラムの作成

1年間あるいは3年間の学習活動を学校全体や学年の目標に照らし合わせながら、各教科・科目で身に付けさせたい力，そのための学習内容や授業スタイルを含めた年間カリキュラム表の作成について検討した。

今年度は，第1学年の普通科，調理国際科，生活デザイン科をモデルとして，教員間で他教科の授業内容も把握でき，教科横断的学習や協同学習に必要な資料として役立てることができるものを作成した。内容をさらに検討しながら来年度は第2学年と第3学年を作成し，特に新入生にとって分かり易い3年間の教育カリキュラムを完成させる予定である。

7 対外的な活動

調理国際科と生活デザイン科を併設することから，昨年度に引き続き専門学科で学んだ知識・技能を発揮することを通して，本校の教育目標である「社会に貢献する生徒の育成」を目的に取り組んだ。また，特別活動部は近隣異校種や近くの北部地域交流センターとの交流機会を継続し，生徒の活躍機会を持つこととした。

第三章 授業改善と実践報告

<国語科> (モデル授業)

表現力を磨くための授業実践
～アクティブ・ラーニングの視点に立った授業づくりを通して～

教諭 垣見優太

はじめに

表現力を向上させるためには、言葉の意味を正しく捉えることや語彙数を増やすこと、また、優れた表現に触れることが重要である。しかし、最も重要なことは、自己の表現を客観的に見つめ直すことだと考える。本校生徒は日常生活において、自己の表現を見つめ直す機会が少なく、より良い表現をしようという意識が低い。そこで今回は、自己の表現を見つめ直すことに主眼を置いた授業を実践し、それが生徒の表現力向上に繋がるかを考察した。

1 取組の概要

(1) 趣旨

- ア わかりやすい表現（他者への説明）に必要な要素を知る。
- イ 自己の表現と他者の表現を比較することで表現力を向上させる。
- ウ 自己の表現を客観視し、自ら添削できるようにする。

(2) 対象

2年6組 39人（女子：39人）

(3) 計画

- ア 三省堂「明解現代文B」の教科書にある『芋ようかん』を題材とする。
- イ 読解の際に、自分の考えを文章化する機会を毎時間設定する。
- ウ グループワークを基本とし、活発に意見交換をさせる。

(4) 方法

- ア 授業において生徒に、個人思考 → 表現 → 協議 → 比較 → 反省という手順を踏ませる。
- イ グループワークとワークシートを使用して、上記（ア）の流れを作る。また、各班の意見を板書させ、それを全体で確認しながら、教員が適宜添削をし、良い表現と悪い表現の視覚化を図る。

2 研究内容

(1) グループワーク

ア 個人思考

小説において重要なことは、登場人物の心情を把握することである。授業では、文章中の表現を根拠に、登場人物の心情を説明させる（書かせる）時間を必ず設ける。人に説明できなければ理解できているとは言えないので、他者に説明することを前提にわかりやすい表現を心がけさせる。その際、他者の意見に流されることを避けるため、いきなり話し合いを行うことはせず、まずは時間を区切って一人で黙々と書かせるようにする。



イ 話し合い（協議）→ 選出

各自答えを書き終えたところで、それをグループ内で発表させる。他者の意見を聞くことによって新たな気づきが生まれ、それが読解の深まりにつながる。全員が発表したら、その中で最もいい答えを多数決で選出させる。その際、Aさん（あるいは自分）の答えを選んだ理由も必ず全員に言わせる。選出すること（＝表現を比較すること）で、生徒はより良い表現に必要な要素（表現の正しさ・情報量・わかりやすさ等）に気づく。

(2) 板書

ア 教員による添削

各グループで話し合いが終わったら、選出された答えを代表者に板書させる。全グループの答えが出そろったところで、全員に黒板を見るよう指示し、教員がそれぞれの答えを添削していく。その際、観点（表現の正しさ・主述の対応・情報量等）を明確にする。その後、教員が（あるいは生徒の多数決で）最も良い答えを選ぶ。良い表現と悪い表現の視覚化を図ることで、生徒はより良い表現に必要な要素を知る。



イ 振り返り

教員の添削方法（添削の観点）を参考に、生徒全員に自分の答えを添削させる。そこで生徒は自分の表現を見つめ直すことになり、表現力が向上する。

(3) 評価

以下①～④は、単元（「芋ようかん」）終了後に実施したアンケート調査において、「表現力は向上したと思うか」という項目についての結果である。

- ① ② ③ ④
- | | |
|---|---|
| ① | ② |
| ③ | ④ |

①と②を合わせると8割の生徒が表現力の向上を実感したということになる。この結果は、ワークシートの記述内容や定期考査における記述問題の正答率にも表れていた。また、感想の中には、「普段の表現にも気を使うようになった」という記述がいくつか見られた。

3 成果と課題

(1) 成果

授業において、個人思考 → 表現 → 協議 → 比較 → 反省というサイクルを繰り返すことにより、生徒により良い表現をしようとする意識が芽生えた。わかりやすく表現することの重要性に気づき、わかりやすく表現するために自己の表現を客観的に添削できるようになった。また、添削方法を教えることで、生徒同士でも表現について指摘し合うようになり、それが読解力の向上にもつながっている。（細かい表現の違いに気づくようになったため）また、定期考査の記述問題に答える生徒が増え、その正答率も向上した。そして何より、楽しそうに授業を受けている。

(2) 課題

グループワークでは、どうしても各班で取り組みの姿勢や時間、理解度に差が生まれてしまった。なかなか話し合いが進まないグループや課題が終わったグループに対する指示や助言が難しく、授業が計画通りに進まないことが多々あった。また、評価の方法に

についても検討の余地があり、改善点を挙げればきりが無い。

おわりに

本校生徒の表現力は総じて低い。日常会話においては問題ないかもしれないが、社会に出てから困ることになるだろう。自分の表現を見つめ直すことで表現力を向上させようと思い、このような実践を行った。授業において、表現 → 比較 → 反省を繰り返すことで、生徒は良い表現に必要な要素に気づき、自ら添削できるようになった。また、生徒同士で表現について指摘し合う様子も見られるようになった。その様子はとても楽しそうで、前向きに授業に取り組んでいると感じた。そういった雰囲気をつくることができたことも一つの成果だと言える。

しかし、課題も残った。グループワークや評価の方法にはまだまだ改善の余地がある。また、今回は「表現力」に的を絞ったが、同時に「読解力」も向上したかと言えば疑問が残る。ただ書かせるのではなく、生徒の読みが深まるような問いを設定することが重要だと感じた。

生徒が自らの表現を見直したように、自分も教員として今回の授業実践を見つめ直し、さらなる改善を加えて、より良い授業を作っていく所存である。

参考書籍 ・西川純編／今井清光・沖奈保子著

「すぐ実践できる！アクティブ・ラーニング高校国語」(2017.5)

<国語科> (モデル授業)

「わからないこと」がわかるための授業実践 ～古典を読み深めるための土台作り～

教諭 小野敬子

はじめに

主体的・対話的に学習するためには、生徒自身が思考せねばならない。そして、思考するためには土台が必要である。本校生徒は、興味や関心の無いことについて学習意欲が低い。特に古典文法に対する学ぶ意欲が低いように感じた。そこで、基礎的・基本的な力(土台)を身につけさせるためには、まず興味や関心を引き出す必要があると考え、実践した。

1 取組の概要

(1) 趣旨

- ア 生徒が漢文訓読のきまりの、理解できる点とできない点を自己認知する。
- イ 理解できない点は聞き、分かる範囲で説明し合うことで知識の理解を深める。

(2) 対象

1年6組 25人(男子:2人, 女子:23人)

(3) 計画

- ア 第一学習社「高等学校 国語総合」の教科書にある『訓読に親しむ』を題材とする。
- イ 暗記させるのではなく、構造を理解させるよう工夫する。
- ウ きまりに沿って、訓読文を書き下し文にすることを目標とする。

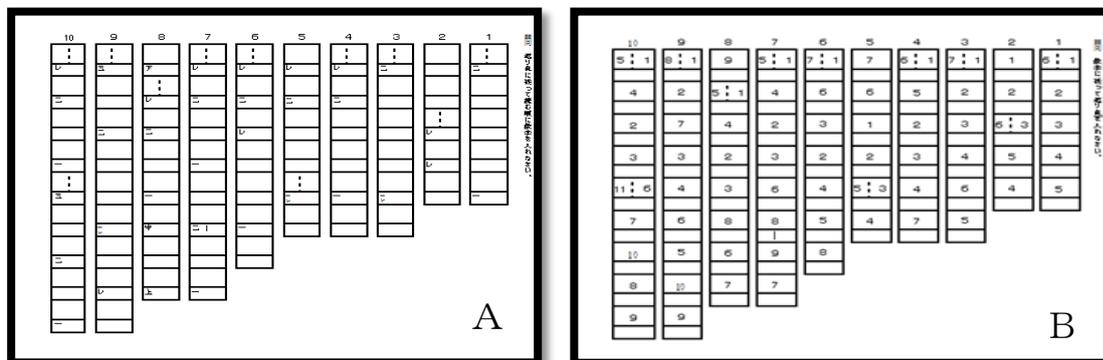
(4) 方法

- ア 漢文のプリントを返り点に従って数字を入れていくものと数字に従って返り点を入れるものの2種類用意した。
- イ 個人で問題に取り組みさせた後、他者と教え合いながら正答を導き出させた。

2 研究内容

(1) プリントの問題を解く

- ア 下記のような2種類のプリントを用意した。



- イ A (B) のプリントを配布し、以下のことを指示した。

①自力で解く。(10分～15分)

- ・教科書やノートなど何を見ても良いが、相談せずに解くこと
- ・分からない問題のどこが分からないかを明確にすること

②自分の解答を模範解答にする。(15分～20分)

- ・席を離れて誰と話しても良い
- ・疑問点は全て解消する
- ・自分の解答に自信が持てるようにする

③相互採点の後、B(A)のプリントを用い、答え合わせをする。(10分～15分)

- ・相互採点の際、互いに解答が違うところをチェックする
- ・チェックの問題について、疑問点があれば質問し、解消する



(2) 評価

ア 自己評価

- ① 分からないところをチェックできた
- ② 分からない問題をなくすことができた
- ③ 分かる問題を人に教えることができた
- ④ 本日の理解度

以上①～④の項目について、A～Eの五段階評価で自己評価させた。

イ 教員による評価

生徒の活動を観察し、問いの取り組み方・話し合いに対する積極性・自主性を評価し、生徒の自己評価シートの内容と合わせて、A～Eの五段階で評価した。

3 成果と課題

(1) 成果

文法事項の理解を講義式の授業展開で行うと、こちらが説明すればするほど、生徒の理解を妨げているように感じるが多かった。しかし、この形式で行うと、理解度が増していることを実感することができた。

要因として考えられるのは、説明する言葉である。生徒同士が生徒たちの言葉で説明し合い、理解し合おうと活動すると、教室のそこそこで「わからん」「わかった」という言葉が飛び交う。私では考えつかないような説明で、友人を納得させている生徒たちの姿は、ひとつ大きな成果であった。

今後も土台作りはこの方法を軸に行っていく。

(2) 課題

今回の授業を通して、古典作品に対する理解や読みが深まったとはいえない。まだ、作品を読む前段階の内容だからである。今回は、古典嫌いが多く出る文法の内容で、いかに興味を持たせ、「わかった」という感覚を持たせるかに重きを置いた。

今後は、彼らの「わかる」ものを用いて、書き下し文にしたり、口語訳をしたりすることを経て、内容への理解、読みを深めていく授業へとつなげていく必要があると感じる。

最近の授業では、「口語訳はできたけど意味は分からない」の壁が立ちはだかっている。口語訳から内容にいかにも迫らせることができるか、古典作品をいかにも身近に感じさせることができるかが、今後の課題である。

おわりに

漢文入門の訓読のきまりを題材とし、いかに古典に対する抵抗感を減らし、興味関心を持たせることができるか、に重きを置いた授業を展開した。はじめは、席を立てて聞きに行ったり、疑問点を質問できなかつたりした生徒たちも、すぐにこの形式の授業に慣れ、今では積極的に質問する姿も見られる。古典文法でも同様に、教え合いやゲームを取り入れた実践を行い、一定の成果は感じている。

しかし、古典作品への理解や深い学びに、ここからどのようにもっていくかが今後の大きな課題である。自分の考えを答えさせるようなオープンな質問を用意しなければならない。またそこから、生徒一人一人がその質問を思考し、答えることができる力を少しずつ身につけていきたい。

参考書籍 ・西川純編／今井清光・沖奈保子著
「すぐ実践できる！アクティブ・ラーニング高校国語」(2017.5)

資料 **【国語科 01】** **【国語科 02】**

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
レ	三	下	レ	レ	レ	レ	二		二
		レ	二	二	二	二			
二		二		レ					
一			二						
レ									
三		中	二	レ		レ	レ		レ
	レ								
二									
	レ								
		上							
一									

問 返り点の練習 (数字)
返り点に従って読む順に数字を入れなさい。

組

番氏名

漢文入門プリント

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
5 1	8 1	9	5 1	7 1	7	6 1	7 1	1	6 1
4	2	5 1	4	6	6	5	2	2	2
2	7	4	2	3	1	2	3	6 3	3
3	3	2	3	2	2	3	4	5	4
11 6	4	3	6	4	5 3	4	6	4	5
7	6	8	8	5	4	7	5		
10	5	6	9	8					
8	10	7	7						
9	9								

問 返り点の練習 (返り点)
数字に従って返り点を入れなさい。

組

番氏名

漢文入門プリント

<地理歴史科> (モデル授業)

知識がつながり合う喜びを感じられる授業
～ジグソー法を通した深い学び～

教諭 前野良太

はじめに

地誌の授業は、2年生から系統地理的に学習してきた知識をまとめ、ある特定の地域を多面的に考察するという意味合いを持つ。しかしその性格故に、登場する事柄の多くが一度学習したことのあるものであり、復習し、暗記を繰り返す学習になってしまいがちである。そこで、生徒それぞれが知恵を持ち寄って課題を解決するジグソー法を採用することで、知識を整理し、地域の特徴をあらゆる視点から考察することができるようになるのではないかと考えた。

1 取組の概要

(1) 趣旨

- ア 資料を活用して、国の特徴を読み取る力を身に付けさせる。
- イ これまで系統地理的に学習してきた内容を関連付け、地誌的な視点で考察させる。
- ウ 各国の共通点・相違点を探すという作業を通して、国同士のつながりや地域的特色などを発見させる。

(2) 対象

3年3組理系 7人 (男子: 7人)

(3) 計画

ア 「東南アジア」について2時間授業を行い、基礎的な知識を身に付けた後、まとめとしてこの授業を実施する。地誌的分野では、地域ごと (特に、「ヨーロッパ」・「北アメリカ」) のまとめを同様の授業形態で行う。今回は共通点・相違点がバランスよく表れる、マレーシア・インドネシア・シンガポールの3国を選択した。

イ 事前に単元「南アジア」において同様の形態で授業を行い、協同学習について理解したうえで今回の授業に臨む。

(4) 方法

- ア 少人数クラスであることを活かし、机をコの字に設置してクラス全員でのグループ活動を取り入れる。
- イ 準備物としてベン図をワークシートに掲載し、各国の共通点・相違点が明確になるよう工夫する。(図1) また、そのまま黒板に貼り付けられる静電気シートを使用する。

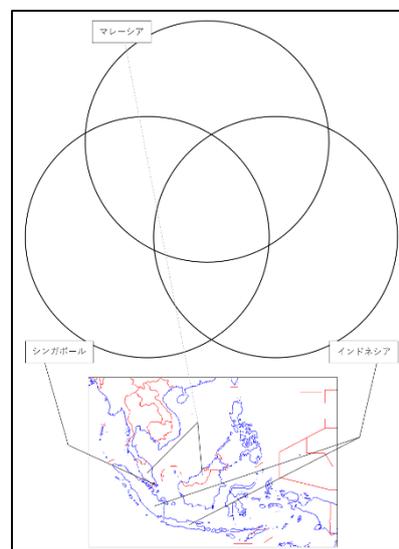


図 1

2 研究内容

(1) 少人数グループ活動

はじめに、7人を3グループに分け、マレーシア・インドネシア・シンガポールの3国について主に二宮書店「データブックオブザワールド」を使用して情報を集めさせた。この教材には膨大な量の情報が掲載されているため、その中から自分たちが求める情報を選び取らせるという活動を通じて資料活用の技能の向上を図った。



写真 1

生徒の手が止まってしまった場合には、ページ数などのヒントを与え、活動を円滑に進められるようにした。グループ内で声を掛け合って手分けしたり、アドバイスをしあったりする姿が見られた。(写真1)

(2) 全体でのグループ活動

ア 集めた情報の共有

次に、各グループが集めた情報を7人全員がそれぞれの役割を担当して話し合い、各国の共通点・相違点について話し合わせた。役割は「ファシリテーター」と「タイムキーパー」が各1名、「記入&説明係」が5名である。ファシリテーターの生徒が他の生徒にうまく指名したり、「タイムキーパー」が時間配分を上手に調整したりしながら円滑に話し合いを進めることができていた。「説明&記入係」もただ調べた情報を述べるだけでなく、「マレーシアも同じじゃないか」や「この特徴はこの国だけだ」などの発言が見られ、生徒が共通点・相違点に気を配って話し合いができていたことが感じられた。

イ 説明

5人の「説明&記入係」で分担し、静電気シートへの記入・黒板への貼り付け作業を行った。シートを黒板に貼り付けるときにはその情報について一言説明をさせた。

(3) 評価

ア 自己評価

授業の初めに図2のような自己評価表を提示し、それに沿ってワークを進めるよう指示した。

	A 3点	B 2点	C 1点	D 0点	得点
特徴を探す	6個以上の項目で特徴を挙げることができた	3個以上の項目で特徴を挙げることができた	1個以上の項目で特徴を挙げることができた	一つも特徴を挙げることができなかった	点
話し合いでの発言	班の中心となって情報を伝えられた	時々、他の班に情報を伝えられた		全く発言できなかった	点
共通点を見つける	議論の中心となり、共通点を見つけることができた	時々、共通点を見つけることができた		全く共通点を見つけられなかった	点
活動への参加	話し合いや用紙への記入、貼り付けなどに、自分から進んで取り組んだ	用紙への記入や貼り付けなどに時々取り組んだ	友達に言われて作業に協力した	全く活動に参加しなかった	点
				合計得点	点

図 2

イ 教員による評価

生徒の活動を観察して、積極的に取り組んでいるのかなどを評価した。

3 成果と課題

(1) 成果

小グループ活動で調べたことを使うと大グループ活動で共通点・相違点がわかるという流れにしたことによって、それらを発見したときに「これも同じなんだ」「意外とこの国だけなんだ」「こんなに多いんだ」といった声を聞くことができた。ただ必要事項を暗記させるのではなく、生徒の頭の中に深く印象付けることができたと感じた。

2年生から7人で授業を受けており人間関係が良好なこともあるが、グループワークに前向きに取り組む姿勢が見られた。役割は分担したものの、例えば記入&説明係の生徒がタイムキーパーの生徒に対し「時間大丈夫？」と声をかけるなど、役割の枠を超えて円滑な進行のために取り組んでいた。どの役割を担当しても主体的に授業に参加する姿勢や他の班員に気を使える協力姿勢が養われた。

また、ただ統計資料を見るだけではなく、他の国のデータと見比べることによってこのデータは特徴的なのかというところまで考察できていたように感じた。当然、データブックには授業で取り上げるほどではない資料も掲載されている。この活動を通じて、本当に必要なデータだけを抽出する資料活用の技能を向上させることができたと感じる。

(2) 課題

前方の黒板に貼り付ける時に一言説明をさせたが、そこでうまく言葉が出てこなかったり、ただ書いてあることを読むだけにとどまってしまう生徒が多かった。ここでの説明の目的は、自分が理解した知識を他の人が理解できるように説明するというもので、この時周辺知識も絡めて説明するよう指示したが、少し難易度が高かったようである。

発表の前に個人で考える時間を設けたり、こちらから必要な情報を提示したりする必要があったと感じる。一つ一つの活動が効果的なものになるよう、その前段階でしっかりと準備をしていきたい。

おわりに

社会科は暗記するばかりではないと日頃から伝えているが、生徒の多くは依然として社会科を暗記するだけの教科ととらえており、その作業に苦手を感じている生徒もいるだろう。自分の知っている知識が他人の持つ知識と繋がり合い、様々な視点から内容を見ることができるようになれば、「社会って面白い」と感じてもらうことができると考える。今後も地理だけでなく社会科全体で、生徒が他の生徒と一緒に学習しながら社会科に興味を持つことができるよう、授業形態や扱う題材を工夫していきたい。

参考書籍

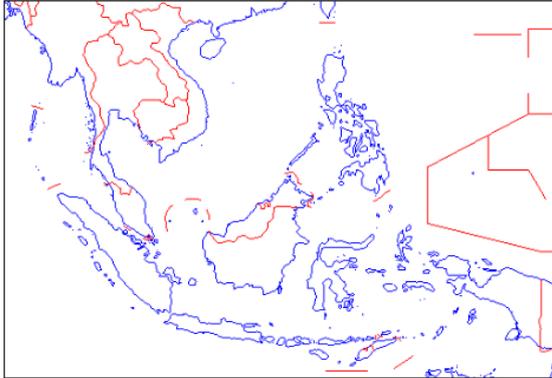
- ・杉江修著
「協同学習入門 基本の理解と51の工夫」(2011年, ナカニシヤ出版)
- ・ジョンソン, D. W. / ジョンソン, R. T. / ホルベック, E. J. 著
「学習の輪 学び合いの協同教育入門」(2010年, 二瓶社)

資料 【地理歴史科 01】 【地理歴史科 02】

地理 B 授業フリップ 東南アジア

3年3組

この授業の目的：系統地理的に学んだ内容を新たに地誌的に考察することで、知識を整理する



【作業】

- ①各国の特徴をサクシード、データブックなどを使って調べ、この用紙に記入する。(14分)
- ②3班で話し合って情報を共有し、3国の共通点は赤で、2国の共通点は黄で、相違点は黒で貼り付け用紙に記入する。(14分)
- ③貼り付け用紙を黒板の図内に貼り付け、説明する。(7分)

話し合い時の役割

A：ファシリテーター B：タイムキーパー（時間配分） C：記入＆貼り付け＆説明係

全員やること

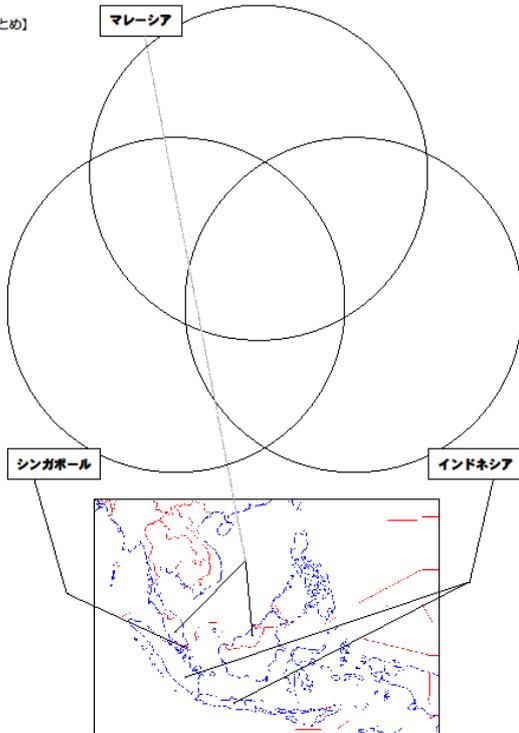
- ・発言 ・共通点を探す ・メモへの記入（任意）

☆自分の国に色を塗る。(or 矢印で示す)

☆班に分かれ、各国の特徴を調べよう。

項目	国名 ()	他国の情報メモ	
気候			
旧宗主国 ※〇〇領と記入			
民族 ※20%以上 ※〇〇系は必須			
宗教 ※上記3つ ※キリスト教除く			
公用語			
工業 (鉄、食、繊維)			
人口 (1年あたり増減) ※1番を黒塗りに ※1000未満に ※1000未満に ※1000未満に			
時間があれば...			
発展段階人口 ※2国が共通			
その他 (※712頁) ※資源、気候等			

【まとめ】



【自己評価表】

今日の取り組みを評価しよう！

	A 3点	B 2点	C 1点	D 0点	得点
特徴を探す	6 個以上の項目で特徴を挙げることができた	3 個以上の項目で特徴を挙げることができた	1 個以上の項目で特徴を挙げることができた	一つも特徴を挙げることができなかった	点
話し合いでの発言	班の中心となって情報を伝えられた	時々、他の班に情報を伝えられた		全く発言できなかった	点
共通点を見つける	議論の中心となり、共通点を見つけることができた	時々、共通点を見つけることができた		全く共通点を見つけれなかった	点
活動への参加	話し合いや用紙への記入、貼り付けなどに、自分から進んで取り組んだ	用紙への記入や貼り付けなどに時々取り組んだ	友達に言われて作業に協力した	全く活動に参加しなかった	点
合計得点					点

【感想、気づいたこと】

<数学科> (モデル授業)

立場を変える。目線を変える。
～多角からのアプローチによって学びを深める～

教諭 大石 剛

はじめに

2次不等式では、方程式との違いがよくわからないまま作業的な式変形で解こうとする場合や、問題の”記号”で答を暗記している場合が多く見られる。グラフを用いた解法を定着させることで様々な問題に応用させたり、数学Ⅱで学習する高次不等式や三角不等式へ繋げたりすることができる考えた。そのために、「講義を受けて不等式を解く」という活動から一歩離れて、様々な角度から2次不等式に対してアプローチすることで理解を深めることができると考えた。

1 取組の概要

(1) 趣旨

- ア 生徒が説明する機会を作ることで思考を言語化させ、学びを深める。
- イ 応用問題にも取り組むことで、様々な角度からその単元へアプローチする。
- ウ 生徒が質問しやすい状況を作り、自然な共同学習の場面を増やす。

(2) 対象

1年3組 28人(男子:15人, 女子:13人)

(3) 計画

- ア 知識は上意下達的に一方的に与えられるものではなく、他者とのやりとりの中で育まれ深められるものであることを生徒に伝え、授業内でも意見交換したり相談したりすることの重要性を訴える。
- イ 生徒が問題を作り、他の生徒がその問題を解く活動を取り入れる。
- ウ 教科書や問題集で応用・発展として扱われている問題も、内容に応じて授業で取り扱うようにする。教師が解法を教えるのではなく、生徒がこれまでの知識や考え方を使って手がかりを見つけられるように促す。

(4) 方法

- ア 問題演習の時間に「生徒同士が自由に質問・発言してよい」「席を自由に移動してもよい」というルールを取り入れる。
- イ 授業内で生徒に問題を作成させ、グループ内で問題を共有して互いに解き合わせる。作成をした生徒は解説も作成し、他の生徒の解答に対して採点をする。
- ウ 2次不等式の解から係数を決定する問題に取り組ませる。

2 研究内容

(1) 生徒同士の授業

ア 自然発生

講義形式に続いて問題演習をする場合、「まずは自分で取り組む」「困っている生徒は周りの人に聞く」「早くできた人は困っている人を助ける」「席は自由に移動してOK」というルールを設けた。

質問に答える生徒が自然に「他人に講義する」という構図になり、「どうしたらうま

く伝わるか」「なぜそのように計算するのか」など試行錯誤する姿が見られた。(写真1) また、質問する生徒も気軽に話しかけることができていた。

イ グループワーク

問題演習にグループで取り組む活動を取り入れた。1人では解決し難い問題に対して4人で知恵を出し合いながら解決に向かうことを目的としている。(写真2)



写真1



写真2

(2) 生徒による問題作成

2次不等式の解法を学習した後に、生徒に2次不等式を作成させた。自由に作成させる場合と、解を指定して作成させる場合とを行った。

(3) 応用問題への取り組み

2次不等式の解から2次不等式を決定する問題に取り組ませた。教科書や傍用問題集で応用として扱われている問題に取り組むことで、既習の内容をどう活かすか試行錯誤する姿が見られた。また、基本的な問題と応用問題が乖離しないように適宜補題を用意して、生徒ができるだけスムーズに問題に取り組めるように留意した。

(4) 評価

ア 自己評価

グループワークをする授業では、最後に振り返りシートを記入させた。自己評価は3段階(下記)で、感想や気づいたこと、学んだことなども記入させた。

A: 自分も良く理解できたし、周りが理解できるように全力を尽くせた。

B: 自分は良く理解できたが、周りが理解できるようには全力が尽くせなかった。

C: 自分がよく理解できなかった。

イ 教員による評価

生徒の活動を教員が観察して、積極的に取り組んでいるか、論理的に説明しているかなどを評価した。

3 成果と課題

(1) 成果

生徒が生徒に教える機会を増やしたことで、「説明するにはちゃんと理解していないといけない」「説明できるように式や図をきちんとかくようになった」「先生よりも質問しやすいから助かる」という声があった。教える側、教えられる側どちらの立場になっても主体的に学びに取り組み、その学びを深めていると感じた。

作問や応用問題には想像以上に前向きに取り組む姿勢が見られた。「因数分解できるように・・・」「グラフがx軸と交わらないようには・・・」と数値設定を試行錯誤したり、解から不等式を決定したりする中でグラフを用いた解法が自然に定着しているように感じた。さらに、これらの活動によって「2次不等式を解く」という基本的な問題への取り組み

もよくなっている。昨年度と比べ定期考査の難易度を上げたにも関わらず平均点は昨年度並みで、知識の定着率は向上していると考えられる。

(2) 課題

数学が苦手な生徒は、かつ人間関係がうまく構築できていない生徒は、問題演習やグループワークで孤立してしまう場合がある。本人や周囲にも「困ったら助けを求めろ」「困っている人を助ける」などコミュニケーション能力の重要性を呼びかけたり、複数人でしか解決できない課題設定をしたりして自然かつ能動的に授業に参加できるようにしたい。

おわりに

数学が苦手な生徒でも心の中には「数学ができるようになりたい」「できると楽しい」という気持ちを抱えている。その向上心や好奇心を如何に引き出すかが重要であり、授業形態や扱う題材を工夫することで意欲向上は大いに可能であることを実感した。これまでの講義形式に加えて様々な授業形態を取り入れ、本来であれば「受験対策」とされるような応用問題にも取り組むことで生徒が様々な角度から2次不等式にアプローチすることができた。その他の単元でも、教科書をベースとしながら生徒が様々な体験を通じて数学に興味を持ち、主体的に取り組める授業を展開できるようにしたい。

参考書籍 ・ 西川純編

「すぐ実践できる！アクティブ・ラーニング高校数学」

資料 【数学科 01】 【数学科 02】

<数学科> (モデル授業)

矢印を分類する授業 ～ベクトルとは何か～

教諭 岩田 健明

はじめに

数学の問題は、ある程度複雑な問題なら、「解いてみたい」と思う。これまで勉強してきた公式や発想を道具に、この難問をどう解いてやろうか、という楽しさがある。しかし数学の授業で、新しい単元の導入時や、単純な計算練習のときは、単なる暗記や反復練習であるから、退屈でつまらない。だから、授業態度も受動的になる。

そこで今回は、ベクトルの導入時の授業で、最初から用語や記号の定義を説明する（例えば、「ベクトルとは“向き”と“大きさ”をもつ量である」と一方的に教える）のではなく、「ベクトルとは何か」ということを、生徒が自分たちで考える（定義する）ことはできないかと考えた。ベクトルは、誰でもなじみのある「矢印」で視覚的に表現できるから、「矢印とは何か」「矢印がもつ要素は何か」という問いからスタートし、「“向き”と“大きさ”をもつ量を“ベクトル”と名付ける」というゴールへ生徒を導くことに挑戦した。これができれば、このベクトルという新しい概念の中で、どんな面白い性質が成り立つのだろうと、興味を持って主体的にこの先の授業に取り組めるのではないかと期待している。

1 取組の概要

(1) 趣旨

ア 受動的になりがちな単元の導入の授業を、最初から講義形式で用語や記号を導入するのではなく、先に思考活動を行い、新しい概念に興味を持たせることにより、主体的に取り組めるようにする。

イ 今回はベクトルの単元の導入で、矢印の分類という思考活動を通して、矢印とは何かを考え、ベクトルの定義に結びつけた。

(2) 対象

2年3組理系 18人（男子：12人、女子：6人）

(3) 計画

ア 「ステップ1」として、9本の矢印（図1）を様々な基準で分類させる。

（例：縦の矢印、横の矢印、斜めの矢印で分類して⑨、⑤⑧、①②③④⑥⑦）

イ 「ステップ2」として、ステップ1で考えた数種類の分類方法を分類する。

（例：向きで分類しているものと、長さで分類しているものと、位置で分類しているものに分ける）

ウ ステップ1, 2の分類を通して、「矢印」には“向き”と“長さ（大きさ）”と“位置”の3つの要素があることに気づく。

エ 自然界には矢印で表せるものがたくさんあることを知る。（例：力、速度）

オ 矢印の、位置の違いを無視したものを“ベクトル”と名付ける。

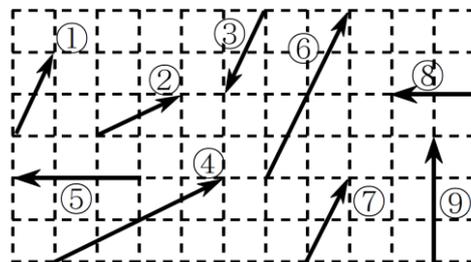


図1

(4) 方法

- ア まず、本時の目標が「矢印がもつ要素を考える」ことであることを伝える。
- イ ステップ1では、とにかく様々な基準で、たくさんの分類方法を考えるように指示した。そのことを強調するために、後で行う自己評価(図2)の項目にも目を通させる。

	A	B	C
①矢印の分類	8種類以上の分類方法を考えた。	4種類以上考えた。	3種類以下であった。
②分類基準の推測	7割以上正しく推測できた。	4割以上正しく推測できた。	4割未満であった。
③分類方法の分類	上手く分類できた。	もっと上手い方法があった。	できなかった。

図2 (自己評価)

- ウ その後、先に分類した結果(例えば⑨, ⑤⑧, ①②③④⑥⑦)だけを発表させ、「どのような基準で分類したのか(例えば、縦の矢印, 横の矢印, 斜めの矢印で分類)」を他の生徒に推測させる。ここが、1人で勉強するのではできない、学校の授業だからできるところであり、ある種「対話的」な活動であると思う。
- エ 8~10種類程度、分類方法が出たところでステップ2に入る。ここではステップ1のようにたくさん考えるのではなく、本時の目標である「矢印がもつ要素は何か」を意識してひとつ考えればよいと指示する。
- オ 個人思考の時間をとった後、周囲で相談させる。どのように分けたかを発表させる中で“向き”, “長さ”, “位置”というキーワードを拾い上げ、矢印にはこの3つの要素があることに気づかせる。
- カ 自然界には力や速度など、矢印で表現できるものがあり、位置が違って同じとする有用性を説明し、矢印の位置の違いを無視したものをベクトルと名付ける。
- キ 自己評価をし、授業の感想を書かせる。

2 研究内容

(1) ステップ1の矢印の分類について

- ア 1, 2種類はすぐに書けるが、それ以上はなかなか思いつかない生徒が多かったので、一度その時点で出ている分類方法を発表させ、分類基準を推測させ、実際の基準を発表者に確認した。すると、そこで出たアイデアをヒントに、たくさんの分類方法を思いついていた。
- イ 意外なことに、普段テストの点数がよい生徒より、そうでない生徒の方が多くの分類方法を思いついていた。
- ウ 発表された分類方法は
- | | | |
|---|-------------------|-----------------------|
| A | ⑨, ⑤⑧, ①②③④⑥⑦ | 縦, 横, 斜め |
| B | ①②③⑦, ④⑥, ⑤⑨, ⑧ | 長さ別 |
| C | ①⑤, ④⑦⑨, ⑧, ③⑥, ② | どこの壁に触れているか |
| D | ①③⑥⑦⑨, ②④⑤⑧ | 縦長, 横長 |
| E | ①②③⑧⑦, ④⑥, ⑤⑨ | 何マス使っているか |
| F | ①③⑥⑦, ②④, ⑤⑧, ⑨ | 傾き別 |
| G | ①②③⑧, ⑤④⑦⑨, ⑥ | 上半分にあるか, 下半分にあるか, 両方か |
| H | ①②④⑥⑦, ③, ⑤⑧, ⑨ | 右上, 左下, 左, 上 |

の8種類である。CやDなど、すでにベクトルの概念を知っている人間には思いつき難いものもあり面白かった(しかもCとDは早い段階で出た)。

(2) ステップ2の分類方法の分類について

- ア ここが一番不安であったが、やはり多くの生徒は、意味がわからず手が止まっていたり、“向きで分けているもの”と“その他”に分けたりしていた。しかし中には（例えばADFH, BE, CGなど）“向き”“長さ”“位置”で分けている生徒も数名いた。
- イ 生徒の口から“向き”“長さ”“位置”という言葉も出てきた。

(3) 感想について

次のような感想があった。

- ・なかなか矢印の分類方法を思いつけなかった。皆面白い分け方をされていて、すごいと思った。頭を柔らかくして考えられるようにしたい。
- ・矢印についてこんなに考えたことはなかった。向き、長さ、位置でできていることがわかって面白かった。
- ・ステップ2が難しかった。言われれば納得した。
- ・ベクトルの問題は、どんな問題があるのだろうと思った。

3 成果と課題

(1) 成果

感想の中には、ベクトルに興味を持ったと読み取れるものがいくつかあった。それが本心であれば、当初の狙い通りであり、上手くいったといえる。

また、普段テストでよい点数をとれる生徒が矢印の分類はあまりできなかつたり、逆に普段テストの点数をとれない生徒が結構できていたりした。つまり、「テストの点数」と「矢印の分類のでき」には相関がないように観察された。定期テストで点数がとれる生徒というのは、授業で先生の言うことをよく理解（インプット）し、真面目に問題集の問題をたくさん解き、その解説もよく理解（暗記）し、テストでそれを書ける生徒であって、今回の矢印の分類では、インプットなしで、自分で考えて分類しなければならないから、できなかったのではないかと思う。

矢印を分類するという事は、9本の異なる矢印の共通点や相違点を見つけ出すことである。そのためには「抽象化」をする必要がある。例えば、①と②は異なる向きの矢印だが、抽象化すれば「右上」や「斜め」として同じである。ステップ2の、分類方法を分類する作業は、さらにもう1段階抽象化して考えることになる。この「抽象化」は、数学の授業で養える重要な思考方法であると思う。そういう意味で、今回の活動は、今まであまりやってこなかった思考経験であり、価値があったと思う。

(2) 課題

感想の中にもあったが、分類させるのが難しかった。生徒は、なかなかアイデアを思いつけなくて皆苦戦していた。あまり活発に意見も出なくて、授業は盛り上がり欠けた。他の人のアイデアに触れて、ようやくそれをヒントに発想（連想）していた。しかしこれは、こういう思考の経験がないから、つまり単に慣れていないからできないという面もあると思うので、もっと経験を積ませることである程度解消できるのではないかと思う。

また、時間がかかる。合計で70分くらいかかった（1回の授業では終わらなかった）。膨大な学習事項がある現在のカリキュラムでは、すべての内容を網羅しようと思うと、授業の導入時のみに時間を使うのは苦しい。

おわりに

昨年度から、授業の仕方を変えてきた。初めは、グループ活動を行い、教師—生徒間の対話だけでなく、生徒—生徒間の対話を取り入れた。確かに効果があり、特に成績下位層は授業に向かう姿勢も変わったし、成績も向上した。しかし成績上位層は、いつも他の生徒より先に理

解して、わからない生徒に説明するだけであった。もちろん、説明することで自分の頭の中が整理でき、相手にわかりやすく説明する表現力を磨くことにもなると思う。しかし、結局いつも、わかる生徒がわからない生徒へ説明する形になっていて、これでは「教師→生徒」だったのが、「生徒→生徒」に変わっただけで、ある意味で一方的な教え込みから脱却できていないと思った。

問題を解くのでは、どうしてもこの構図になってしまうので、問題を解くこと以外の部分に注目した。そこで考えたのが、今回の「分類」である。分類方法に唯一の正解はないから、自由に考えて複数の答えを出せる。数学でこういったことは珍しいのではないだろうか。しかも今回のような内容なら、既習事項や習熟度に影響されないから、全員が同じスタートラインに立っている。結果的に、上述のように予想外の生徒が活躍し、普段とは全く異なる生徒間の関係になった。

「主体的・対話的で深い学び」を生徒にさせるために、これからも様々な方法を考え、試していきたい。

参考書籍 ・相馬一彦

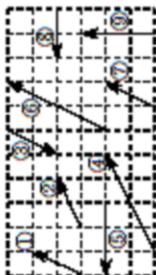
『「主体的・対話的で深い学び」を実現する！ 数学科「問題解決の授業」ガイドブック』（明治図書出版株式会社）

資料 【数学科 03】

数学B ベクトル No. 1 ～矢印がもつ要素は何か～

2年3組 菅 氏 丞

Step 1 No.1～③の矢印の色々な基準で分類(7ルール)をつけてみよう。



◇自分の考え

Step 2 Step 1では分類方法を、分類(7ルール)をつけてみよう。

Step 3 せじめ

Step 4 自己評価

	A	B	C
①矢印の分類	6種類以上の分類方法を考えた。	4種類以上考えた。	3種類以下であった。
②分類基準の推測	7割以上正しく推測できた。	4割以上正しく推測できた。	4割未満であった。
③分類方法の分類	上手く分類できた。	もっと上手い方法があった。	できなかった。

①矢印の分類... _____ ②分類基準の推測... _____ ③分類方法の分類... _____

感想・疑問など

◇誰の考え

<理 科> (モデル授業)

理科を身近に感じるための授業実践 ～生徒自ら問題を挙げ、その解決策を考える～

教諭 丹 後 麻 衣

はじめに

本校の生徒は理科に対して「難しい」と思う生徒が多いように感じる。生徒が理科を身近なものと思うためには、生徒自身が主体的に学ぶ授業が必要であると考えた。教師がわかりやすく生徒に説明するという知識伝達型の授業だけでなく、生徒が主体的・対話的に学ぶことを取り入れた授業を実践した。

1 取組の概要

(1) 趣旨

- ア 身近な環境問題について興味を持つ。
- イ 問題の解決策について、自分の言葉で説明できるようになる。
- ウ 自分の意見を表現するだけでなく、他者の意見を聞き、よりよい考えを述べられる。

(2) 対象

2年2組 40人 (男子：23人，女子：17人)

(3) 計画

- ア 生徒が理科を身近に感じられるような題材を設定する。今回は生態系の分野の導入で環境問題を取り上げることにした。
- イ 授業の前半で教科書に出てくる生物用語を理解させ、後半で環境問題について考えさせる。

(4) 方法

- ア 4，5人のグループを作らせる。
- イ どのような環境問題があるか、自分の言葉で考え、その後、今回の授業で学んだ語句を使って説明させる。一人一人が個人で考えた後、難しそうな場合はグループで協力させる。
- ウ 上記イで考えた環境問題について、解決するために自分ができることは何か考えさせる。最低限一人一つは挙げさせ、その後、グループで意見を交換し合い共有する。自己の考え方にとらわれず、他者の意見を聞き、新しい発想につなげられるようにする。

2 研究内容

(1) 生物用語の理解

- ア 教科書に出てくる語句 (生態系，環境要因，生物的環境，非生物的環境，作用，環境形成作用，生産者，消費者，分解者など)

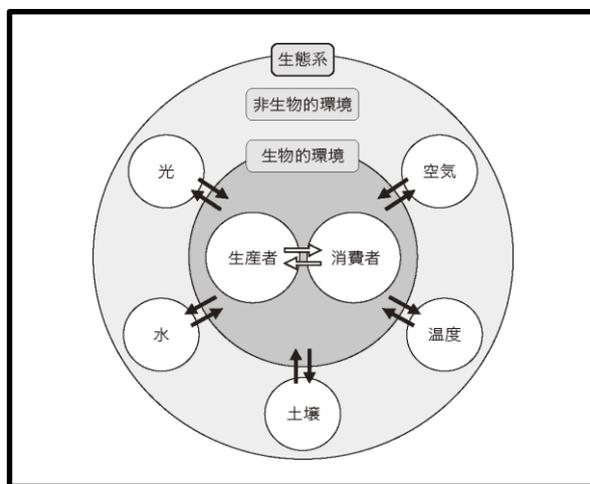


図1 生態系の全体

について学ばせた（図 1）。知識伝達型になってしまいがちであったが、生徒に中学校で学んだ知識を復習させつつ新しく学んだ知識を結びつけ、自分なりに理解させるよう心がけた。

(2) 生徒が取り上げた環境問題とその解決策

(例) 地球温暖化

(説明) 生産者である植物を伐採することによって二酸化炭素が増え、それにより地球温暖化が進み、非生物的環境に影響が出て生態系のバランスが崩れる。

(解決策)・自動車をできるだけ使わず、自転車の利用や歩きを心がける。

- ・植林する。
- ・my 箸を持つ。

Q3.解決するためにわたしたちができることは何だろうか。最低限、1人1つは挙げよう。

メンバーの名前	できること
Aさん	<u>ガソリンもCO₂の放出に影響があるのでエゴカーへ全てがわる。</u>
Bさん	木を植えてリ・節約する
Cさん	森林を増やす。
Dさん	排気ガスを減らしていく。
Eさん	My 箸を持つ

写真1 グループで共有した意見

下線部は今回学んだ語句である。個々で考えた時にはなかなかここまでの説明文を作り出すのは難しそうであったが、グループで協力させたら得意な生徒を中心に話し合っていた。また、地球温暖化の例以外にも森林伐採、大気汚染、外来種など多くの問題が挙がり、その原因はヒトの活動が主である、というところまで気づかせることができた。

(3) 評価

ア 自己・他己評価

自己評価として、自分が理解できたか・できなかつたか、自分のグループ全員が理解できたか・できなかつたか、を評価させた。また、感想・疑問点などを自由記述できる枠を設けた（写真2）。他己評価として、グループ内で1番頑張っていた人を書かせた。

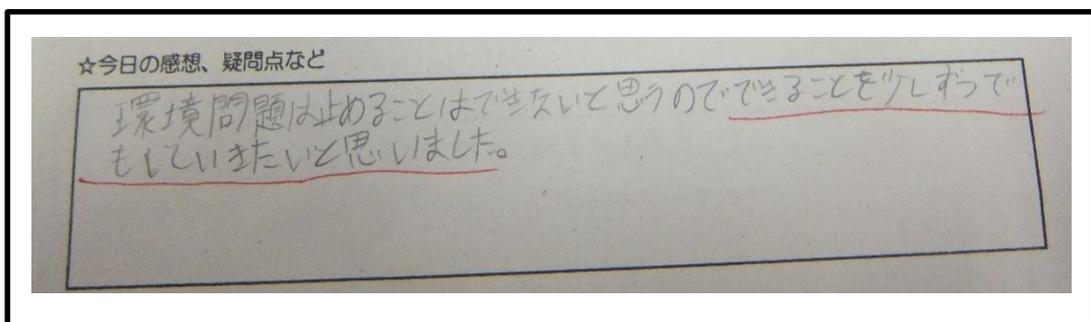


写真2 自由記述欄

イ 教員による評価

生徒の活動を教員が観察して、積極的に取り組んでいるか評価した。また、今回学んだことが定着しているかを確認するため、定期考査に同様の問題を出し、評価する機会

とした。

ウ 生徒アンケートより

- ・問題点や解決策はまだたくさんあると思うので、深く考えてみたい。
- ・もっと先のことを考えて一人一人が危機感を持つ必要があることを改めて学んだ。
- ・都市開発によってどのくらい生態系のバランスが崩れてしまうのか疑問に思った。

3 成果と課題

(1) 成果

今回、授業にグループワークを取り入れたが、グループワークの前には必ず個人で考える時間を設けた。その際、個人で考えることが難しかった生徒はグループでの話し合いにおいて周囲の生徒から教えてもらい、理解した様子が見られた。自力で考えることができた生徒も、他者の考えを聞き、新しいアイデアにつなげていたように感じる。

(2) 課題

生徒のグループワークの取り組みは良かったが、細かいところで課題を2点ほど感じた。

1つ目は展開の工夫である。今回は生物用語を学んだ後に環境問題について考えるという順で展開したが、逆にしても良かった。まず始めに、環境問題について考える方がより取り組みやすく、生徒たちの思考の流れに合っていたように感じる。

2つ目は意見の発表である。時間の関係で取り入れることができなかったが、グループで話し合った意見をクラス全体に紹介するところまで出来ると良かった。

ちょっとした工夫で生徒の理解度も変わると考えられるので、今後の教材研究などに活かしていきたい。

おわりに

今回の授業で取り扱った問題を定期考査で出題したところ(写真3)、大多数の生徒が正答することができていた。やはり、自ら問題について考え、他者と共有したことが理解を深めることにつながったと感じる。これからも、生徒が理科を身近に感じ、主体的に取り組めるような授業展開を心がけていきたい。

↵

5] 次の文章を読み、下の問いに答えよ。↵

生物とそれを取り巻く環境を一体としてとらえたものを(ア)という。生物を取り巻く環境を構成する要素は、ある生物に影響を与えるほかの生物である(イ)環境と、水や空気、土壌などの(ウ)環境に分けられる。(ウ)環境が(イ)環境に与える影響を(エ)といい、(イ)環境が(ウ)環境に与える影響を(オ)という。(イ)環境と(ウ)環境は相互にはたらか合い、動的な(ア)をつくり上げている。↵

↵

(1) 空欄ア～オに適する語句を答えなさい。↵

(2) 生態系のバランスを崩す問題には何があるか、説明しなさい。ただし、以下の語群にある語を最低限1つは使用すること。↵

【語群】生態系 環境要因 生物的環境 非生物的環境 作用 環境形成作用 ↵
生産者 消費者 分解者 食物連鎖 食物網 生態ピラミッド 栄養段階 ↵

(3) (2)の問題について、解決するためにわたしたちができることは何だろうか。2つ答えなさい。↵

↵

写真3 出題した考査問題

<英語科> (モデル授業)

意見構築に向けての論理的・多角的に物事を見る力を養うための授業実践
～経済・環境問題に挑戦!もし、あなたが市長なら…～

教諭 荻 窪 雄 太
教諭 杉 山 美 月

はじめに

昨年度より文科省からの研究指定を受け、「主体的に学ぶ力」の向上を目指し、授業改善を試みている。本年度は、主題が「課題解決に向けた主体的・協働的な学び」から「主体的・対話的で深い学び」に変更され、昨年度培った力を基礎とし、さらなる学力向上へと研究を進めてきた。

本年度は、昨年度培った力をもとに、意見構築のための深い学びとして、論理的・多角的に物事を見る力を養うことを目標とした。

1 取組の概要

(1) 趣旨

- ア 今まで学んだ英語を用いて、自分の考えを英文にすることができる。(主体性・技能)
- イ 仮定法や比較表現などの文法を正しく理解するとともに、重要語句を身につけることができる。(知識)
- ウ 本文に関する質問に英語で答えることができる。(技能)
- エ 様々な意見を聞くことで、自分の考えを再構築することができる。(対話的で深い学び)

(2) 対象

- 2年3組 上位クラス 18人 (男子:8人, 女子:10人)
- 2年3組 下位クラス 17人 (男子:12人, 女子:5人)

(3) 計画

ア 単元の指導計画

本単元に10時間を配当した。1～3時間目は、登場人物や島の状況など、本文内容の把握に当てた。4～7時間目に“Why was Kate angry?”を中心とした意見の構築やKateの立場からの意見を深めさせる時間とした。同時進行にはなるが、6～9時間目には、“If you were Tom would you continue to promote tourism?”を主題とし、市長である主人公Tomの立場であればこれからの島の未来をどうするかについて考えを深めさせた。10時間目には、今までの意見の総まとめとして、自分の意見を再構築させる時間とした。

イ 個人から始まり、全体へ広げ、個人に落とす指導

最終的な個人の学力向上に向けて、本単元を通して、個人で取り組み、ペアやグループ活動で広げ、クラス内で共有し、最後に再度自分で取り組むことを意識した授業改善を試みる。

ウ 授業後の意識変化

クラス内発表・討論の導入後の意識変化として、理解・視点・表現の点について調査する。

エ 生徒のライティングを元に、模試を意識した定期考査の作成

2 研究内容

(1) 深い学びのための指導

ア 既習の英語表現の定着

VISTA English Communication II (SANSEIDO)の Lesson7 The Galapagos Island に関連した自作教材を導入した。本文には、昨年度から今までにおける既習表現や単語を取り入れ、それらの復習・定着を図った。

イ 視点の例の提示とブレイン・ストーミング

意見を構築するための指導として、視点の多様化に重点を置いた。始めに一例を示し、一つの物事に対して様々な視点があることを伝えた。次に教材の質問である、“Why was Kate angry?”に対し視野を広げるため、ブレイン・ストーミングを行った。後に、心情・社会・私生活・理想など大きな分類分けをし、意見の傾向に目を向けさせた。(写真1)



写真1 分類分けをしている様子

(2) ライティング活動の充実

ア ライティングの段階的指導

“Why was Kate angry?”と、“If you were Tom would you continue to promote tourism?”のそれぞれに対して、意見を3つ用意させた。どちらの質問に対しても、まず意見を日本語で書かせ、その後その日本語を易しく短い日本語文に書き直させた。そして、最終的にその簡単にした日本語を英文に直すという段階を踏んで指導を行った。

イ 英文作成におけるミスの明確化

英文を書く際に注意すべきことを7点に絞り生徒に提示した。それをもとに自己添削を促したり、教員添削の際にはその番号を記入したりして、各自の間違いの傾向を可視化した。定期テストの自己表現問題においても、この基準をもとに評価した。

(3) 対話的な言語活動

ア 発言に対する指導

昨年度培った「自分の意見を述べる」ことに加え、「他人の意見を理解して聞く」ことを単元通しての目標に掲げた。クラス全体で相手が言っていることを理解しようとする姿勢を育み、また、発言者においても、自分の言いたいことを相手に伝えられるよう努力させた。クラス内討論では、賛成派・反対派に分かれ、意見を対立させ、反論を促した。(写真2)(写真3)

また、発表や討論後は自分の活動の様子を振り返らせ、自分ができているものや足りないことについて考えさせた。

イ 意見の可視化

「他人の意見を理解する」手助けとして、付箋を使用し、テーマをつけ、まとめさせたり、発現内容を黒板に書いたりすることで、各自が発言した内容を明確にする工夫を施した。



写真2 討論の様子1



写真3 討論の様子2

(4) 意見の再構築

単元を通して、まず自分の意見を持ち、次にそれをグループやクラス内で伝えたり、クラス内討論などを経て様々な視点からの意見を把握させたりした。最終段階として、それらから得たものをもとに自分の意見を再度見直させ、“If you were Tom would you continue to promote tourism?”に対してエッセイを書かせた。また、それを参考に、模試の形式をとり、意見の要約を選ばせる問題を作成し、定期考査に出題した。

3 成果と課題

(1) 成果

昨年度の研究目標である「間違ふことを恐れず積極的に英語を活用する」ことの上積みとして、本年度は、自身の意見の構築のため、論理的・多角的に物事を見る力を養うことを目標として取り組んできた。また、既習の英語表現の定着やそれらを対話する際に使えるようための工夫を施した。

事後アンケートによると「①他の生徒の発言をどのくらい理解できたか」については、7割を超える生徒が、ほぼ理解できた・まあまあ理解できたと答えた。授業では、他人の発言に対して聞こうとする態度だけでなく、相手が理解できていない場合にもう一度違う表現で伝えようとしている姿が見受けられた。授業を参観した教員からは、「分からなかった時に、素直に分からないと言える雰囲気がある」という意見も出ており、クラス全体で理解してから次へ進もうという姿勢が備わっていたように思う。

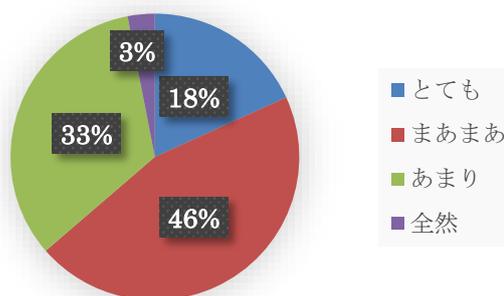
今回の研究内容である視点の観点からは、「②質問に対して、様々な視点で考えることができたか」「③他の生徒の発言を聞いて、他の様々な視点に気づく事ができたか」について聞いた。②では約1/3の生徒が、③では約8割の生徒がとても、あるいはまあまあと回答した。②よりも③のほうができた割合が高いことから、自分で考察することに対して苦手意識を持っている生徒も多いことがうかがえる。ライティング活動においても、生徒の想像だけで成り立っており、本文と結びつきが薄いため説得力に欠ける内容を書く生徒が非常に多かった。個別に直したり、生徒の言いたいことを引き出しつつ助言をしたりと、フォローをしたが、生徒自身の力のみでは、まだ練習が必要であると感じた。

表現の点では、「④発言する際に、今まで習ってきた表現を使用することができたか」「⑤発言を通して、使える英語表現が増えたか」の両質問に対し、約9割の生徒が、とても、または少しできた（増えた）と解答しており、教材の適切な難易度設定やその指導内容であったことがうかがえる。

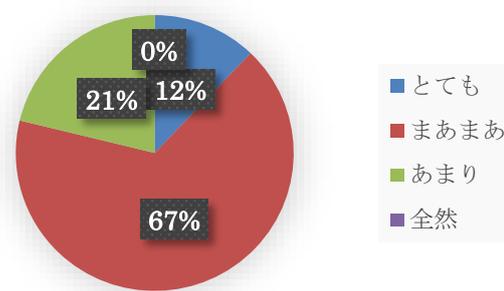
生徒からは、様々な意見が寄せられた。以下は、その一例である。

- 「理解度」
- ・意外と簡単な英語になると理解ができることが分った
 - ・英文を理解してもらえず、より簡単にくずして言うということがまだまだできていない

②様々な視点で考えられたか



③他の視点に気づく事ができたか



- 「視点」 ・自分と違う視点でいろいろなことに気づいていてすごいと思った
- ・反対の意見を聞いて少しはその意見に賛同することができた
- 「表現」 ・相手の意見に反論ができて良かった
- 「話し合い」 ・一つの問題について、いろいろな方面から意見交換し、それが活気づいたとてもいい話し合いになったと思う

各生徒が、この活動を通して達成したことやそれぞれの課題を見つけたことは、今後の成長に期待を持つことができる。

(2) 課題

単元の最終課題として、他人の意見を聞いて、自分の意見を見直し、再構築することを掲げて進めてきた。各生徒が考え抜いた意見がそろそろ反面、他人の意見と自分の意見を比較し、さらに考え直そうという生徒はまれであったように感じた。他人と比較しても、自分の意見の方が筋が通っていると感じているのであれば問題ないのだが、最終エッセイを提出した際に個人的に聞いてみると、そこまでは至らなかったように思う。自分が精一杯考え、一定の達成感を得られたことで満足したのが原因であると考察した。また考査問題では、4択問題の正答率は約半数であった。英文補充の問題では、ほとんどの生徒が不正解であった。

さらなる深い学びや学力定着に向けて、来年度の課題として取組んでいきたい。

おわりに

2年間にわたり、従来の一方的な授業からの脱却と、生徒の主体性を重んじた学力向上に向けての授業改善を試みてきた。

1年目は、目指す生徒像を明確にし、生徒にとって親しみやすい授業内容の考案や、各生徒に対しての役割分担、そして英語に対する苦手意識の克服に努めた。2年目はそれに加え、さらに主体的で深い学びへとつながるよう、他人の発言に対する理解、視点の多様化、そして既習表現の活用を目標に進めてきた。

2(3)イにあるような工夫で、発表や討論において生徒の意見を聞き逃すことなく、クラス内で円滑に共有できたことが共感や反感を生み、活発で主体的な活動につながったように思う。またそれに向けた、例の提示や意見交換、添削など毎時間の小さな活動が、積極的に英語を活用する意識向上へとつながったのも一因である。

「今回よりももっと活気のある意見をぶつけ合えるような話し合いのできる授業がしたい」という生徒の意見にもあるように、継続して英語が使いたくなる学びこそが深い学びに繋がるのだということを確認することができた。

- 参考書籍**
- ・ジョージ・ジェイコブス、マイケル・パワー、ロー・ワン・イン(2005)
「先生のためのアイデアブックー協同学習の基本原則とテクニクー」(日本協同教育学会)
 - ・西岡加名恵(2017)
「アクティブ・ラーニング 学習発表編(楽しい調べ学習シリーズ)」(PHP 研究所)
 - ・水戸部修治(2017)
『「話す・聞く・書く」でアクティブラーニング! 5・6年生』あかね書房

Rubric

/15

	5点	3点	1点
Speaking	前を向いて全体に自分の意見を英語で発言することができる。	ペアワークであれば、ペアの方を見て、自分の意見を英語で発言することができる。	原稿を見ながら自分の意見を発言することができる。
Listening	他の生徒の意見を積極的に聞き、様々な考え方を理解することができる。	他の生徒の意見を積極的に聞き、半分くらい理解できる。	他の生徒の意見を積極的に聞くことができない。
Learning	観光が自然環境に及ぼす影響と、地元住民にもたらす恩恵を理解できる。	観光のメリットやデメリットを知ることができる。	観光のメリットやデメリットを理解することができない。

Class _____ No. _____ Name _____

Questionnaire

- 他の生徒の発言をどのくらい理解できましたか。
 ほぼ理解できた まあまあ理解できた あまり理解できなかった 全然理解できなかった
- 質問に対して、様々な視点で考えることができましたか。
 ほぼ満足にできた まあまあできた あまりできなかった 全然できなかった
- 他の生徒の発言を聞いて、他の様々な視点に気づくことができましたか。
 ほぼ満足にできた まあまあできた あまりできなかった 全然できなかった
- 発言する際に、今まで習ってきた表現を使用することができましたか。
 たくさん使用することができた 少し使用することができた あまりできなかった
 全然できなかった
- 発言を通して、使える英語表現が増えましたか。
 非常に増えた 少し増えた あまり増えなかった 全く増えなかった

☆ 感想

Class _____ No. _____ Name _____

考查問題の抜粋

IV 次の会話は、「この島で観光促進を続けていくべきかどうか」というテーマで行われたディスカッションの一部である。空欄1～4に入る最も適当なものを、それぞれ下のア～エのうちから1つ選べ。(8)

Mr. Kakimi: Today, Let's talk about what Tom should do. If you were Tom, would you continue to promote tourism? What do you think? ...Yes, Eri?

Eri: I would stop promoting tourism. First, if I continue promoting tourism, malaria may spread. Because of malaria, people can't live on the island. I don't think people want to live in such a town. Second, the beauty of nature on the island will disappear, so the island's income source will be lost. This is a serious problem.

Mr. Kakimi: So, you think that (1)?

- (1) ア you worry about malaria because it is dangerous to tourists
- イ promoting tourism is dangerous and also we will lose money
- ウ everyone hates mosquitos and also it is sad to live in such a town
- エ we will lose our island's beautiful scenery and malaria

Eri: That's right.

Yusuke: I don't think so. If I were Tom, I would continue to promote tourism. First, sightseeing is not dangerous to us. We can check visitors, so they will not bring malaria and viruses. Second, I think now people on the island are very happy, so they can say "Stop tourism." Even if I stopped tourism, I think they would change their opinions.

Mr. Kakimi: I see. You are saying that (2), right?

- (2) ア we don't have to worry about malaria, and happy people can disagree with tourism
- イ we are happy to see the beautiful scenery of the island, and we should change our opinions
- ウ promoting tourism is safe because there are good drugs for malaria and viruses
- エ money is more important than the environment, and now we are happy because we have money

Yusuke: Yes.

Taro: I agree with Yusuke. First, thanks to tourism, people on the island can live happily. If it stops, they will lose their jobs and must find other ones again. Second, we can't make any progress without hurting the environment. But if there were some people who said like Eri, I would start a new project to protect nature, too.

Mr. Kakimi: OK, so if you were Tom, you would (3)?

- (3) ア stop promoting tourism because of lack of jobs and the environmental problem
- イ stop promoting tourism to protect people on the island and nature
- ウ continue to promote tourism not to make people lose their jobs, and you would begin a new business as well
- エ continue to promote tourism not to lose the job as a mayor, and you would accept Eri's opinion.

Taro: Exactly.

Chihiro: If I were Tom, I would stop promoting tourism. First, it is not easy to protect nature. Once it is broken, it will never go back just like before. Second, the visitors might throw away their trash on a road or in a river. It will result in polluting the island. That's why we should give up the tourism.

Mr. Kakimi: Thank you, Chihiro. You mean that (4)?

- (4) ア we should ask people not to break nature and to do a volunteer work to pick up the trash
- イ you want to know how to promote tourism and how to solve the problem
- ウ you want to go back to the past to pick up the trash
- エ to save the environment is difficult, and by promoting tourism, the trash problem will come up

Chihiro: That's right.

Miho: Then, even if we stop promoting tourism, we can't go back just like before, too. We have already known the convenient life. We cannot throw it away. What we can do now is only making progress. It is important for us to think how to make the island develop.

Mr. Kakimi: So you would (5)[ア continue to promote tourism / イ stop promoting tourism], and we need to find [6]?

Miho: Right.

Q1 空欄 1～4に入る最も適切なものを、それぞれの下にあるア～エのうちから1つ選べ。

Q2 本文の内容に合うように、(5)に入る適切な語句を[]内から選び、記号で答えなさい。

Q3 本文の内容に合うように、[6]に適切な語句を入れ、要約文を完成させなさい。

<LT (ホームルーム)> (モデル授業)

対話の重要性を気付かせる取組

～Nonverbal Communication ゲームを用いて～

教諭 神戸 亮二

はじめに

主体的・対話的な学びを推進していく上では、生徒相互の会話とコミュニケーションが重要になってくる。本研究の指定を受け、授業などでグループ学習を推進し意見交換や発言力を高めているが、人間関係は言語以外の意思疎通も必要とされている。それは、非言語的な要素であり、たとえば相手の表情や視線であったり、沈黙をもたらす場の雰囲気であったりする。

普段の学習では、グループで積極的な言語活動ができる工夫を行っているが、協同作業に無言という条件を与え、Nonverbal (非言語) コミュニケーションによる相手の気持ちを推察する能力を高めるとともに、会話・対話の重要性を気付かせる取組を行うこととした。

1 取組の概要

(1) 趣旨

- ア 普段気付いていない Nonverbal コミュニケーションについて理解を深める
- イ 人の感情の動きと現れ方、感情が与える影響について理解する
- ウ チームで協力することの意味を知る

(2) 対象

2年5組 39人 (男子：5人、女子：34人)

(3) 計画

- ア 普段のコミュニケーションとは異なる非日常的な環境で実施することから、クラス内の生徒同士にある程度人間関係が構築された2学期のLT (ホームルーム) の時間に行うこととした。
- イ 本来はLTの50分では短いですが、コミュニケーションについて改めて考える機会が確保できるような内容と時間配分を目指した。



(4) 方法

- ア 今回の取り組みには、ファシリテーター (facilitator : 促進者 中立的な立場で進行や活動の支援を行う担当者) を設定した。ファシリテーターには、今回使用する教材を知り指導の実績がある教員をお願いした。
- イ ファシリテーターは進行役に専念してもらい、活動中は担任として生徒の参加状況を観察することに努めた。
- ウ 教材は、株式会社プレスタイム社監修の「協力ゲーム」を使用した。

2 研究内容

(1) 事前準備

- ア 5人グループ7班と4人グループ1班を作成しておく。欠席者を見込んで、4人グループ用の教材を複数用意しておく。
- イ 男子は各班に1人割り当てる班構成とする。

(2) ゲームの展開

ア はじめ

- (ア) 班編成の指示を行い、机を合わせて準備をさせる。机上には何も置かず、机は密着させ活動がスムーズに行われるようにする。
- (イ) 班の代表者に今回行うゲームの課題とルールが印刷された用紙を渡し、代表者から班員に読み上げて伝達させる。
- (ウ) ゲームは無言で行うため、途中で質問が出ないように開始前に疑問点がないか十分確認しておく。
- (エ) 確認を終えたら、今後は無言で作業を行うことを伝え、紙片の入った封筒を渡して開始させる。

イ 展開

- (ア) ファシリテーターは活動が停滞している班には必要により支援を行い、参加しやすい場づくりを行うこと、興味・関心を引き出して合意形成を図ることなど手助けを行う。
- (イ) 担任は生徒の取り組み意欲や参加状況などの観察を心がける。

ウ まとめ

- (ア) 課題が達成された班には振り返りの時間を与え、用紙に記入させる。
- (イ) 「ふりかえり」用紙に記入された内容を各班から発表させ、この活動から得られるコミュニケーションの大切さについて考えさせる。

(3) 配付資料

- ア 課題とルールの用紙【資料 保体 01】
- イ ゲームの紙片セット【資料 保体 02】
- ウ 「ふりかえり」用紙【資料 保体 03】
- エ 生徒に配った課題用紙【資料 保体 04】
- ※【資料 保体 03】を参考に作成

3 成果と課題

(1) 成果

クラス担任が説明・進行・支援・まとめ役を全て行うと、説明に気を配り生徒の観察に注意が及ばなくなる。個々の生徒が持つ能力や意欲を見つけるためには、今回のように進行役（ファシリテーター）と観察者（担任）が役割分担を行うことが必要と感じた。担任は指示や展開を気にすることなく観察に専念することができるため、気持ちと時間の余裕が生まれた。



生徒の感想では、班ごとに違いがあった。早く課題を終わらせた班では、「周囲の状況を見ながら、自分のことを考えることが難しい」という意見が多く、表情や視線、相手の状況を見なければならぬ趣旨を理解していた。課題を解くのに苦労していた班では、「言葉やジェスチャーなど普段当たり前に使っているコミュニケーションツールの大切さに気付いた」という意見が多く、相手の気持ちを推察する能力を高めることについて

の理解は少なかったと感じる。しかし、会話・対話の重要性を気付かせることはできた。

担任として、冷静に見ていると普段から相手のことを気遣いコミュニケーションが取れている生徒がこの課題を早く終わらせる傾向にあることに気がついた。Nonverbal（非言語）コミュニケーションでも、相手のことを気遣ったり、相手のことをよく見たり、理解しようとしたりすることが大切なことに気がついた。

(2) 課題

生徒は様々な躰きに出会うことから、ファシリテーター役は先々に現れる状況を予想し、対応策を考えていなければならない。進行役を務めることは、実践しながら経験を積んでいくことが必要とされる難しさを感じた。また、観察者として参加したことにより、普段の授業の様子を客観的に見ることができ、積極的に授業に参加している生徒や少しぼんやりしている生徒など授業では見られない細かい部分まで観察できた。

約40人のクラスで先生が一人で授業をしながら、生徒一人ひとりのことをしっかり観察することは難しいと改めて感じた。

おわりに

主体的・対話的な学びを、生徒自身に体験的に学ばせ、より深く考えさせる学習として、今回の活動は有効であったと感じている。

無言の環境は普段の生活場面では少ないが、声を出せなかったり、声を出しても聞こえなかったりする労働環境ではありえることである。単なる経験ではなく、生徒の将来にはコミュニケーション能力を身につけることが必須である。

生徒の多くは高校を卒業したら就職する。話せない環境や聞こえない環境などさまざまな場面でコミュニケーションをとり、仕事を円滑に行わなければいけない。高校生活の中でこのコミュニケーション能力を身につけるために今回の活動を多くの生徒に行わせてから、各教科や各先生の協力のもと、学校全体で主体的・対話的な学びを更に進めていけると良いと感じた。

参考書籍 ・株式会社プレスタイム社 <http://presstime.co.jp/>
新版 Creative Human Relations 人間関係トレーニング・マニュアル集 107
「協力ゲーム Communication」 著作：星野欣生 津村俊充

資料 【L T01】 【L T02】 【L T03】 【L T04】

※教材の使用及び報告書への掲載は、株式会社プレスタイム社に確認済み。(10/12)

2. 課題とルールの提示 (10分)

(1) ファシリテーターは以下のような横造紙を掲げ、「グループの課題」と「ルール」を読み上げる。

「協力ゲーム」

グループの課題
グループは配られた紙片全てを用いて、全く同じ形、同じ大きさの図形を各自の前に1つつ作る。

ルール

1. 作業は無言で行う。
2. ジェスチャー（身振り、手振り）や、何らかの合図（音を出したり、喉払いをしたりなど）はしてはいけない。
3. 自分の欲しい紙片を、勝手に他のメンバーからとることはできない。また、請求してもいけない。
4. 自分の持っている紙片を、他のメンバーに渡すことはできる。ただし、自分の手元には、少なくとも1片の紙片は必ずあること。（すべての紙片を他の人に渡すことはできない）
5. 紙片を渡すときには、必ず相手の手が、相手の前に置くこと。相手の図形を作るような置き方をしたり、誰に渡したのかわからないような渡し方はしない。
6. でき上がっている図形を渡すときは、必ずその図形をくずして渡すこと。
7. 紙片を渡されたメンバーはそれを拒否することはできない。
8. 課題が達成できたと思ったら、挙手してスタッフに知らせ、確認してもらう。

紙片セットの作り方

紙片は、厚手の画用紙（裏表のちがわないもの）を次のように切離して作り、そのままでは正方形にならないような組み合わせにして、5つの対角に入れておく。

5人組用3片セット

対角 紙片の組合せ例
 A.....e, h, i
 B.....a, a, a, c
 C.....a, j
 D.....d, f
 E.....b, c, f, g

5人組用4片セット

対角 紙片の組合せ例
 A.....a, b, d, g
 B.....a, c, d, h
 C.....a, a, b, e
 D.....a, a, a, f
 E.....b, c, c, c

※上記の組み合わせと違った5つの正方形もできる。

ふりかえり

1. この実習で、自分の態度や行動の仕方、感情の動きなどについて気づいたことは？

- _____ さん

3. グループは、どのようなプロセス（過程）を経て課題を達成したと思いますか？

4. その他、気づいたこと、学んだことを自由に書いてください。

H29.10.05 第5限
2年5組 LT

＜対人関係に必要なコミュニケーション＞

コミュニケーションとは、社会生活を営む人間が互いに意思や感情、思考を伝達し合うことで、私たちが学校や社会、地域や家族など周りの人と関わっていく中でもっとも大切なものです。

「自分が伝えたいこと」と「相手の理解」を一致させることがコミュニケーションと言えます。

1 具体的に、あなたはどのような方法でコミュニケーションを取っていますか。

- (1.言葉 発言とその内容)
- (2.文字 書かれた内容とその表現方法)
- (3.行動 体の動き・ジェスチャー)
- (4.視覚 絵・服装など目で捉えるもの)
- (5.態度 顔し出す雰囲気、また、声の調子・音量)

2 今回の「協力ゲーム」でどのようなことを考えましたか？
各自1行以上で感じた事を文章で記入してください。

＜総合的な学習の時間・教科指導＞（第3学年・地歴公民科）

「新聞切り抜き作品」作りへの取り組み ～「新聞って面白い！」社会への関心を持たせるきっかけとして～

教諭 前田 洋子

はじめに

平成25年度から、地歴公民科の教員で、授業や総合的な学習の時間を利用して「新聞切り抜き作品」作りを行ってきた。この「新聞切り抜き作品」作りは、NIE（教育に新聞を）事業の1つとして、近年多くの学校で取り組まれており、中日新聞社がコンクールも実施している。いろいろな記事を読むことで、読解力・語彙力・文章力が向上し、考える力・判断力・表現力も高まると期待されるが、何よりも生徒の意識が「新聞って難しそう」から「新聞って面白い」と変わっていくきっかけとなる。本校に限らず、最近では新聞を読まない生徒が増えているが、多くの知識・情報を知り、広い視野を育てていくのに新聞は貴重な教材である。今年度は第3学年と連携し、7月から9月にかけて普通科2クラス・調理国際科1クラス・生活デザイン科2クラスで「新聞切り抜き作品」作りを行った。まだまだ見直しや反省が必要であるが、今年度の取り組みの様子を報告する。

1 取り組みの概要

(1) ねらい

- ア 新聞記事に目を通す機会を作り、新聞や社会の動きに関心を持つきっかけとする。
- イ グループでの活動を通じ、コミュニケーション能力や協調性を養う。
- ウ 模造紙に貼ったり、レイアウトを考たりすることで、表現力・構成力を育てる。

(2) 対象

- 3年1・2組（普通科）80人（男子：55人、女子：25人）
- 3年4組（調理国際科）38人（男子：14人、女子24人）
- 3年5・6組（生活デザイン科）76人（男子：3人、女子：73人）

(3) 計画

- ア 実施時期は、1学期期末考査後から9月まで。9月末の文化祭での展示と、9月中旬から始まる就職試験に合わせた。
- イ 普通科は総合的な学習の時間を利用し、担当教員が指導にあたった。調理国際科・生活デザイン科は総合的な学習の時間がないため世界史Aの授業時間を利用し、教科担任が指導にあたった。
- ウ 普通科の担当には、昨年度まで指導の経験のある地歴公民科の教員が含まれていなかったため、中日新聞社NIE事務局の加藤榮治氏に作品作りのオリエンテーションを受けた。

(4) 方法

- ア 中日新聞社のコンクール規定に合わせ、1グループは1～3名とする。だいたいどのクラスも15グループぐらいになった。
- イ 文化祭において作品を展示した。管理職の先生・第3学年の先生が優秀作品を選考し、「〇〇賞」のリボンを作品に貼った。これは生徒にたいへん好評であった。



文化祭での展示

2 取組内容

(1) テーマを決める

新聞を持ち寄り、グループで話し合っってテーマを決める。新聞は自宅から持参させるほか、教員が自宅や図書室のものを持ってきて用意した。テーマは実際に新聞が手元にあった方が決めやすい。あまり難しいものにしてしまうと、意見や感想が書きづらくなるので、できるだけ身近な話題を選ぶようにアドバイスを。今年度は、藤井聡太四段、北朝鮮のミサイル問題、九州北部豪雨などのテーマが多く選ばれていた。また、調理国際科は「食」に関するテーマが目立った。

(2) 新聞記事を集める

2～3時間ほど使って、テーマに関する内容の記事を見つけ、切り抜いていく。新聞には社説やコラム、読者の意見なども載っているので、全体に目を通し幅広く記事を集めるようにアドバイスする。また、新聞に載っているものなら、写真や広告、文字も使えることを伝えると、「何かないか」と改めて新聞を見直す生徒もいた。たくさんの切り抜きをする必要があるので、グループ内で分担を決めたり、声を掛け合ったりしながら作業を進めていた。



(3) 記事を分類・仕分けする

5年ほどこの活動を指導しているが、最も重要だと思うのはこの段階である。生徒は、集めた記事を模造紙に貼ればよいと単純に考えてしまい、記事の内容を読み取り、それを再構成して自分たちの考えをまとめていくということがなかなかできない。できるだけ生徒の中に入り、アドバイスをしていくが、グループ数も多いので細かな指導ができないのが毎年の課題である。ここでしっかり考えることができれば、作品全体もまとまりのあるものになるし、タイトルやレイアウトも決まってくる。

(4) タイトル・レイアウトを考え、記事を貼る

ただ貼るだけではなく、見る人にインパクトを与えるにはどうすればよいか、グループで話し合いながら作業をしていく。生徒が最も工夫をし、協力しているのがこの作業である。切り抜いた写真を使ったり、自分たちでイラストを描いたりするなど、特に生活デザイン科の生徒は熱心に作業をしていた。しかし、内容よりもこの作業の方に熱が入ってしまったグループもあった。

(5) コメント・感想・まとめを書く

この内容が作品全体のできを大きく左右するが、この段階までくると、グループによって取り組み方にばらつきがでてきた。適当に書いて「もうできた」というグループもあれば、しっかり考えて書いているグループもある。いきなり模造紙に書かせるのではなく、一度他の用紙に文章の下書きをさせ、教員が内容を指導するべきであった。

(6) 評価（事後アンケートから抜粋）

ア 切り抜き作品作りの前と後で、新聞に対する印象はどのように変わりましたか。

- ・新聞はもっと堅苦しいものだと思っていたけど、読んでみると楽しく、わかりやすく書いてあるとわかった。ニュースや新聞が身近に感じられるようになった。
- ・今まで知らなかったことがたくさん載っていて興味を持った。
- ・テレビ以上に情報を得られるものだとわかった。
- ・普段気にしていなかったニュースを見るようになった。もっと知りたくなった。
- ・自分の気になる記事だけでも目を通すようになった。
- ・小さな記事でも大事なことや地域のこととかたくさん書いてあるから、楽しく新聞を見ることができるようになった。

イ 「新聞切り抜き作品」作りの感想を書いて下さい。

- ・新聞をじっくり読むことはあまりなかったけど、今回記事を探すためにたくさんの新聞を読んで、面白いなと思いました。新聞一つでいろいろなことがわかるので、それもメリットだと感じました。
- ・家で新聞を取っていないので、詳しく見ることができよかったです。
- ・今回じっくりと新聞の内容を読んで知ることができ、悪いニュースなら対策を考えたり、良いニュースは友人や家族などに教えたりすることができました。
- ・ニュースではわからないことがたくさん載っていて、自分の住んでいる地域のこと載ると楽しくなったり、たくさんの経験ができ、学ぶことができました。
- ・自分たちで進めなければならず、だからこそ、頭に内容がしっかり入ってきてとても楽しかったです！！
- ・一人でやるのではなくグループで協力して作り上げていくものだから、完成したときの達成感がすごかった。
- ・協力しないとできないので、あまりしゃべらない友だちとも話すことができた。
- ・人によって選ぶ記事やデザインのしかたが違ってとても面白いなと思いました。



3 成果と課題

(1) 成果

アンケートからわかるように、新聞に興味を持ち、読んでみようと思うようになった生徒が増えたことがいちばんの成果である。普段読まない新聞も、友だちと記事を探すうちに気になる見出しに目がとまり、知らず知らずのうちに読むようになっていた、という生徒が大変多かった。作業中に記事の内容についての質問をしてくるなど、きっかけさえあれば社会のできごとに興味を持ち、もっと知りたいと思うようになるということもわかり、地歴公民科の教員としてうれしい成果が見られた。

(2) 課題

反省としては、作品完成後に発表の機会を持たなかったことである。特に調理国際科・生活デザイン科は世界史Aの授業時間を使っているため、あまり多くの時間を新聞切り抜き作品作りに回すことができない。しかし、自分たちの考えを深めて発表するための活動も生徒には意義のあるものとなるはずなので、工夫していかなければならない。

そして最大の課題は、作品を完成させるということだけが目標になってしまっている現況から前進し、記事の内容を読み取り、自分たちの考えをまとめていくという深い学びにまで到達させるにはどうすればよいかということである。そのためには、この活動を地歴公民科や3年生だけでなく、他の教科や学年にも広げていく必要があると考える。教科の特性や学年の状況をふまえ、3年間を見通した指導計画を作って連携を深めていくことができれば、より深い学習活動に発展していくことも期待できる。

おわりに

5年前に普通科のみでこの活動を始めた、生徒が予想以上に楽しそうに新聞を見ていたのが印象的であった。その後活動を普通科以外にも広げ、試行錯誤を繰り返して現在に至っている。選挙権が18歳以上に引き下げられ、主権者教育をいかに進めていくかということも現在の課題の一つであるが、その点からもこの活動のようなNIE事業は有効であり、多くの知識・情報を得て自分の意見を作り上げていくことに結びついていこう。本校の生徒に適切な指導方法を探りながら、今後もこのような取り組みを続けていきたい。

第四章 研究の成果

1 文部科学省の視察

(1) 訪問日

平成 29 年 11 月 6 日（月）午前 11 時 15 分から午後 3 時 20 分まで

(2) 文部科学省担当者

初等中等教育局主任視学官 清原洋一 様

初等中等教育局視学官 長尾篤志 様

初等中等教育局教育課程課 加藤友治 様

(3) 推進地域（教育委員会）担当者

愛知県教育委員会高等学校教育課指導主事 伊藤君江 様

(4) 日程

11:15 岩津高等学校 到着

協議会(1)

12:00～12:50 第4限 授業参観①

12:50～13:30 昼食

13:30～14:20 第5限 授業参観②

14:30～15:20 頃 協議会(2)

15:20 岩津高等学校 出発

(5) 研究授業

ア 第4限

地歴	授業担当者	科目	クラス	場所
公民	前野良太	地理B	3-3理	第2多目

数学	授業担当者	科目	クラス	場所
	大石 剛	数学I	1-3	1-3教室

英語	授業担当者	科目	クラス	場所
	杉山美月	コミュニケーション英語II	2-3	2-3教室
	荻窪雄太	コミュニケーション英語II	2-3	多目的室B

イ 第5限

国語	授業担当者	科目	クラス	場所
	垣見優太	現代文B	2-6	2-6教室
	小野敬子	国語総合(古)	1-6	1-6教室

数学	授業担当者	科目	クラス	場所
	岩田健明	数学B	2-3理系	多目的室B

理科	授業担当者	科目	クラス	場所
	丹後麻衣	生物基礎	2-2	2-2 教室

(6) 協議会

ア 参加者

文部科学省担当者 3 名，愛知県教育委員会 1 名
 校長，教頭 2 名，授業担当 8 名（協議会（2）のみ）
 研究支援委員 1 名（石田裕久 様）
 教科支援員 3 名（国：永井聖剛様，数：青山和裕様，英：米津明彦様）
 計 19 名

イ 場所

校長室及び会議室

ウ 内容

①協議会(1) 11:15～

教育委員会の取組の説明
 学校の取組（授業実践，研究推進等）の説明

②協議会(2) 14:30～

教科支援員と授業担当者の意見交換
 文部科学省の指導助言

エ 指導助言等

- ・長尾視学官からは、「たくさんの疑問を持たせる授業を行うことが必要」「授業を見てもらうことで視野を大きくし，振り返りに活かす」「他教科の教員に授業を見てもらい，別の角度から意見をもらう」等の助言を受けた。
- ・清原主任視学官からは、「2年目の先生方は，昨年度の失敗例や良かった点を踏まえた授業を」「他教科を含めたグループでの改革推進委員会が大切」「指導方法や使用教材等の良いところを見つけ出す研修会を」等の助言を受けた。

(7) 協議会の成果

協議会(2)の時間帯では，会議室内を4ヶ所に分け，前半の30分間を教科支援員と授業担当者の意見交換ができる時間とした。各教科の授業担当者は，事前に教科指導員と指導案作りを行っており，研究授業終了後すぐに時間を設けることで，指導方法や授業展開など細かい部分の振り返りをすることができた。

英語科は，協議会(2)前の第5限に教科会を設定し，研究授業の振り返りを全員で行った。教科支援員から助言を得られることで，教科全体の研修会とすることができた。

協議会の持ち方を工夫することで，一教員の取組を教科全体に広められた。また，教科相互で取り組みのようすを知る機会にもなった。

2 教科研究会の発展による成果

(1) 初任者研修との連携（国語科：高等学校初任者研修と合同開催）

初任者研修で大学教授から教科への助言を得る機会は少ないことから，本校の研究と協同開催することにより新しい試みの初任者研修とすることができた。初任者は

「主体的・対話的で深い学び」の研究を直接現場で学び、初任研修を通して近隣の高校に研究の成果を普及することに繋がった。

(2) 地区教科研究会の会場（英語科：地区別授業研修（あいちのスーパーイングリッシュハブスクール事業に基づく英語の授業研修）

岡崎・西尾地区の英語科教諭による教科研究会を、本校を会場として開催した。本校で研究に携わる2名の教員が授業を行い、本校教員のみならず参加校（15校）の教員により刺激となった。



英語科地区別授業研修

(3) 教育委員会指導主事の助言（国語科，数学科，英語科）

教育委員会指導主事伊藤君江様に教科会へ参加を依頼したことにより、研究方針を各教科同様に聞くことができた。

(4) 取組意識の向上

教科会で授業支援員から直接指導を受けることにより、研究に対する共通意識を持つ機会ともなった。さらに、「学校全体として、これからの社会で必要とされる能力を高めること。国語科なら何かを考える。その上で、教科としての目標を定めることが大切」という説明を聞き、研究の原点に戻ることができた。（国語科）



授業支援員からの助言

また、①入学した生徒が「岩津の授業でできるようになった」という感覚を持たせること、②生徒のニーズに合わせた方法を考えること、③生徒を信じ、今まで学んだ力で新たな問題へのチャレンジをさせること、④「どんな力をつけさせるのか」というゴールから見ること、⑤1年次からの取り組みが重要であること等、多くの助言を得ることができた。（数学科）

3 授業改善の結果

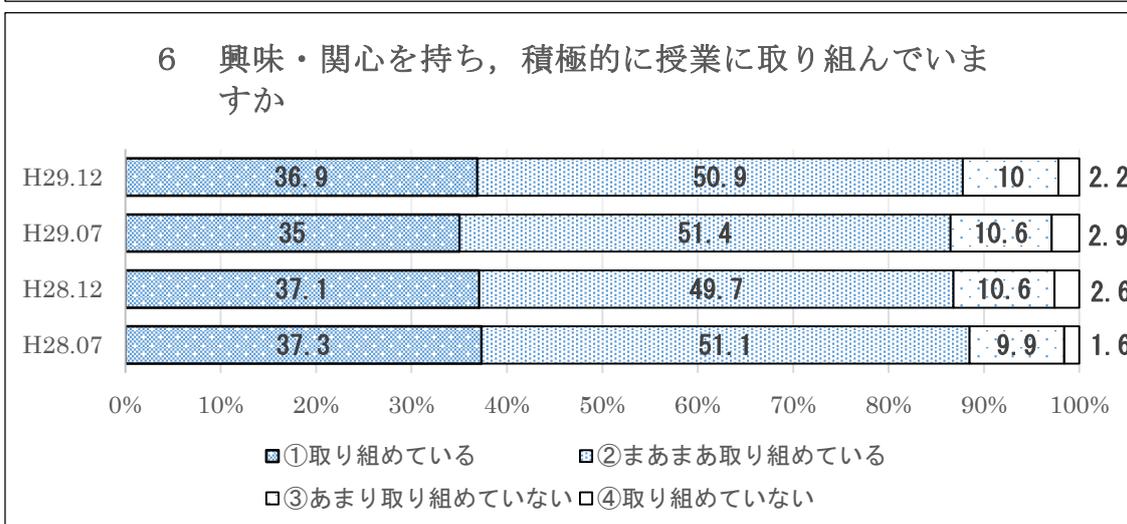
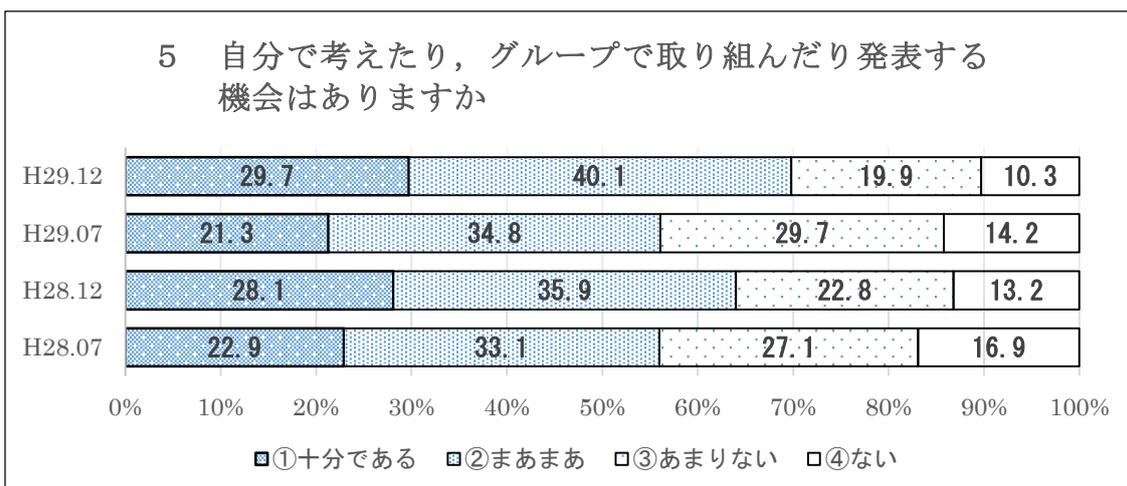
(1) 生徒による授業評価

本校は、「授業評価シート」を利用し生徒によるアンケートを実施している。各教員が担当する授業の生徒に実施し、自己の指導法の改善を行うことを目的としている。研究指定を受けた昨年度、アンケート項目の見直しを行い、「5 自分で考えたり、グループで取り組んだり発表したりする機会がありますか」と、「6 興味・関心を持ち、積極的に授業に取り組んでいますか」の2項目を追加した。

(2) 調査時期とアンケート結果

※1名の教員が複数のクラスでアンケートを実施している場合がある

項 目					
5 自分で考えたり，グループで取り組んだり発表したりする機会がありますか					
	①十分である	②まあまあ	③あまりない	④ない	アンケート総数
H29.12	29.7%	40.1%	19.9%	10.3%	2,282
H29.07	21.3%	34.8%	29.7%	14.2%	3,166
H28.12	28.1%	35.9%	22.8%	13.2%	2,796
H28.07	22.9%	33.1%	27.1%	16.9%	2,129
6 興味・関心を持ち，積極的に授業に取り組んでいますか					
	①取り組んでいる	②まあまあ取り組んでいる	③あまり取り組んでいない	④取り組んでいない	アンケート総数
H29.12	36.9%	50.9%	10.0%	2.2%	2,264
H29.07	35.0%	51.4%	10.6%	2.9%	3,153
H28.12	37.1%	49.7%	10.6%	2.6%	2,796
H28.07	37.3%	51.1%	9.9%	1.6%	2,129



(3) アンケート結果の分析

4月は教員の異動があることから、アンケートを実施した7月時点の数値は下がりますが、その後12月までに本校に赴任した教員が、新しい学習形態に取り組んでいることが読み取れる。2年間の取組で、「自分で考えたり、グループで取り組んだり発表する機会」は増え、協同的な学習形態は浸透している（「5」の項目）。しかし、生徒が「興味・関心を持ち、積極的に授業取り組んで」いるかという点、こちらの数値に変化はほとんどなかった。授業形態は整えているが、今後は生徒の興味・関心を引く授業の工夫が必要と感じられる（「6」の項目）。

4 公開授業とアンケート結果

(1) 平成29年度公開授業

ア 実施日時

平成29年6月15日（木） 受付：10:50～ 授業見学：第3限

イ 対象

中学校の先生、中学3年生の保護者、学校評議員等

ウ 目的

学校・各学科の説明や授業見学等を通じて、本校の教育活動についての情報提供を図る。

エ 参加人数

中学校保護者20名、中学校教員17名、企業3名、学校評議員3名、
PTA役員・委員13名 合計56名

(2) アンケート項目（回答数：29年度49、28年度85 数値は%）

A 公開授業の実施時期（6月中旬）について、どう思われますか。	<省略>					
B 来年度は何曜日の実施が適当と思われますか。	<省略>					
C 生徒の身だしなみはいかがでしたか。			H29		H28	
1 ほとんどの生徒はよい身だしなみであった。			100		95	
2 一部の生徒の身だしなみがよくなかった。			0		5	
3 身だしなみの悪い生徒が目立った。			0		0	
D 各学科の生徒の様子はいかがでしたか	普通科29/28		調理科29/28		生デ科29/28	
1 ほとんどの生徒は意欲的に取り組んでいた。	51	56	84	92	76	73
2 普通。	47	43	16	8	24	21
3 一部の生徒の取り組みがよくない。	2	1	0	0	0	6
4 やる気のない生徒が目立った。	0	0	0	0	0	0
E 校内（教室、廊下、階段）は整理整頓、整備されていきましたか。			H29		H28	
1 全体的によく整理整頓、整備されていた。			81		75	
2 普通。			19		25	
3 汚れや破損が目立った。			0		0	
F 今回の公開授業について、印象やお気付きの点があれば自由にご記入下さい。						
①中学3年生の保護者（主な回答）						

- ・一人一人の熱意や意欲が一目で見てわかった。全てにおいてやる気や笑顔をみせて楽しくやっていました。
- ・全体的に落ち着いていて自分の学びたいことに集中できる環境だと思いました。
- ・どの先生も親切でしたので高校に対する不安が和らぎました。
- ・挨拶がしっかりできてとてもよい印象。
- ・授業中はとても静かで勉強している姿はとてもよいと思いました。
- ・時間が短かったので半日ぐらい自由に見たかった。

②中学校の先生、評議員、企業、PTA（主な回答）

- ・落ち着いた雰囲気や板書、先生の明るい話し方など生徒に勧めたい様子でした。施設、環境もよかったです。
- ・生徒との距離の取り方がとても上手で教え子たち(勉強はあまり得意ではなかった子たち)が難しい内容でも楽しそうに学んでいる姿が見られて嬉しかった。安心しました。
- ・1年生を中心に授業を見学させて頂きました。卒業生達がとても明るい笑顔を見せて授業に臨んでいる姿を見て、大変嬉しく思いました。
- ・昨年も参加させて頂きましたが、今年の方が全体的によかったです。トイレ、廊下もきれいでした。特に態度が悪い生徒もいなく元気に挨拶してくださり気持ちよかったです。
- ・生徒の真剣なまなざしで授業をしている姿が大変よかったです。
- ・どの学年のどの授業も生徒達が一生懸命学ぶ姿が見られました。とてもすてきな学校だと思いました。

(3) アンケート結果の分析

身だしなみや挨拶などの指導面は以前から重点的に行っている。本年度になって指導方法に変化はないが、昨年度に比べ数値は上がり、来校者から「ほとんどの生徒はよい身だしなみであった」(100%)の評価を得た。また、「挨拶がしっかりでき」ていたり「元気に挨拶して」いる記述が見られ、自主的・主体的な生徒の姿勢を感じることができる。

アンケートの集計結果では、意欲的に取り組む姿勢は各学科とも良くなっているとは言いが、一部の生徒の取り組みがよくないと評価されることはかなり減った。協同学習を導入した授業方法の改善に取り組んで1年が経過したところであったが、授業に対する姿勢に生徒の変化が出てきていると言える。

調理国際科と生活デザイン科は普通科に比べて意欲が高かった。協同作業を伴う実習授業に積極的に参加している様子が見える。

5 協同年間カリキュラム表の作成

- (1) 教科主任者会において作成の意義を確認し、内容等を検討した。
- (2) 各教科において年間学習指導計画をもとに、教員がこの時期に他教科はどのような学習をしているか理解できるようなものとして作成した。
- (3) ある教科の授業において他教科で取り扱っている題材・単元を取り上げるなど、教科横断的学習を取り入れた協同学習を実施するための資料になるよう作成した。
- (4) 今年度は、第1学年の普通科、調理国際科、生活デザイン科をモデルとして作成し次年度以降に第2学年と第3学年を作成する予定である。

(5) 学習内容だけでなく、各教科が身に付けさせたい力を育成する工夫や授業スタイルを表の中に組み入れることによって、教員だけでなく生徒にとっても分かり易いものになるよう改善していく予定である。

< 1年生普通科のカリキュラム表 >

学年目標	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年		
教科・科目	国語総合 (現代文分野) (古典分野)	現代社会	公民	数学I	数学A	化学基礎	理科	体育	保健	音楽I(選)	美術I(選)	外国語	家庭	総合的な学習の時間	学校行事等
単位数	4	2	3	3	2	2	3	1	2	2	3	2	1	1	1
内容	【国語①】 世界は謎に満ちている 【古文入門】 かなづかい 【国語②】 水の東西 【漢文入門】 【故事成語】 形勢詞・形容詞の活用 訓読に親しむ 【小説③】 夢十夜 【物語と日記】 伊勢物語 【小説④】 卒業ホームラン 【説話と国書】 徒然草 【物語】 伊勢物語 【小説⑤】 卒業ホームラン 【説話と国書】 徒然草 【物語】 伊勢物語	【小説①】 羅生門 【古文入門】 かなづかい 【小説②】 水の東西 【漢文入門】 【故事成語】 形勢詞・形容詞の活用 訓読に親しむ 【小説③】 夢十夜 【物語と日記】 伊勢物語 【小説④】 卒業ホームラン 【説話と国書】 徒然草 【物語】 伊勢物語 【小説⑤】 卒業ホームラン 【説話と国書】 徒然草 【物語】 伊勢物語													

※進修コースは、5教科(国語、公民、数学、理科、外国語)の各単元を普通科に比し、より広く深く、課外授業、模擬試験の受験なども実施している。

＜1年生生活デザイン科のカリキュラム表＞

学年目標	生活デザイン科 生徒の基本的な生活習慣の確立を目指し、充実した学校生活を送る土台作りを行う。											
	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
国語総合	【小説①】 【小説②】	【小説①】 【小説②】	【小説①】 【小説②】	【小説①】 【小説②】	【小説①】 【小説②】	【小説①】 【小説②】	【小説①】 【小説②】	【小説①】 【小説②】	【小説①】 【小説②】	【小説①】 【小説②】	【小説①】 【小説②】	【小説①】 【小説②】
英語	【英語①】 【英語②】	【英語①】 【英語②】	【英語①】 【英語②】	【英語①】 【英語②】	【英語①】 【英語②】	【英語①】 【英語②】	【英語①】 【英語②】	【英語①】 【英語②】	【英語①】 【英語②】	【英語①】 【英語②】	【英語①】 【英語②】	【英語①】 【英語②】
現代社会	【現代社会の課題】 【現代社会の課題】	【現代社会の課題】 【現代社会の課題】	【現代社会の課題】 【現代社会の課題】	【現代社会の課題】 【現代社会の課題】	【現代社会の課題】 【現代社会の課題】	【現代社会の課題】 【現代社会の課題】	【現代社会の課題】 【現代社会の課題】	【現代社会の課題】 【現代社会の課題】	【現代社会の課題】 【現代社会の課題】	【現代社会の課題】 【現代社会の課題】	【現代社会の課題】 【現代社会の課題】	【現代社会の課題】 【現代社会の課題】
数学	【数学Ⅰ】 【数学Ⅱ】	【数学Ⅰ】 【数学Ⅱ】	【数学Ⅰ】 【数学Ⅱ】	【数学Ⅰ】 【数学Ⅱ】	【数学Ⅰ】 【数学Ⅱ】	【数学Ⅰ】 【数学Ⅱ】	【数学Ⅰ】 【数学Ⅱ】	【数学Ⅰ】 【数学Ⅱ】	【数学Ⅰ】 【数学Ⅱ】	【数学Ⅰ】 【数学Ⅱ】	【数学Ⅰ】 【数学Ⅱ】	【数学Ⅰ】 【数学Ⅱ】
地理	【地理Ⅰ】 【地理Ⅱ】	【地理Ⅰ】 【地理Ⅱ】	【地理Ⅰ】 【地理Ⅱ】	【地理Ⅰ】 【地理Ⅱ】	【地理Ⅰ】 【地理Ⅱ】	【地理Ⅰ】 【地理Ⅱ】	【地理Ⅰ】 【地理Ⅱ】	【地理Ⅰ】 【地理Ⅱ】	【地理Ⅰ】 【地理Ⅱ】	【地理Ⅰ】 【地理Ⅱ】	【地理Ⅰ】 【地理Ⅱ】	【地理Ⅰ】 【地理Ⅱ】
体育	【体育Ⅰ】 【体育Ⅱ】	【体育Ⅰ】 【体育Ⅱ】	【体育Ⅰ】 【体育Ⅱ】	【体育Ⅰ】 【体育Ⅱ】	【体育Ⅰ】 【体育Ⅱ】	【体育Ⅰ】 【体育Ⅱ】	【体育Ⅰ】 【体育Ⅱ】	【体育Ⅰ】 【体育Ⅱ】	【体育Ⅰ】 【体育Ⅱ】	【体育Ⅰ】 【体育Ⅱ】	【体育Ⅰ】 【体育Ⅱ】	【体育Ⅰ】 【体育Ⅱ】
保健	【保健Ⅰ】 【保健Ⅱ】	【保健Ⅰ】 【保健Ⅱ】	【保健Ⅰ】 【保健Ⅱ】	【保健Ⅰ】 【保健Ⅱ】	【保健Ⅰ】 【保健Ⅱ】	【保健Ⅰ】 【保健Ⅱ】	【保健Ⅰ】 【保健Ⅱ】	【保健Ⅰ】 【保健Ⅱ】	【保健Ⅰ】 【保健Ⅱ】	【保健Ⅰ】 【保健Ⅱ】	【保健Ⅰ】 【保健Ⅱ】	【保健Ⅰ】 【保健Ⅱ】
美術	【美術Ⅰ】 【美術Ⅱ】	【美術Ⅰ】 【美術Ⅱ】	【美術Ⅰ】 【美術Ⅱ】	【美術Ⅰ】 【美術Ⅱ】	【美術Ⅰ】 【美術Ⅱ】	【美術Ⅰ】 【美術Ⅱ】	【美術Ⅰ】 【美術Ⅱ】	【美術Ⅰ】 【美術Ⅱ】	【美術Ⅰ】 【美術Ⅱ】	【美術Ⅰ】 【美術Ⅱ】	【美術Ⅰ】 【美術Ⅱ】	【美術Ⅰ】 【美術Ⅱ】
外国語	【外国語Ⅰ】 【外国語Ⅱ】	【外国語Ⅰ】 【外国語Ⅱ】	【外国語Ⅰ】 【外国語Ⅱ】	【外国語Ⅰ】 【外国語Ⅱ】	【外国語Ⅰ】 【外国語Ⅱ】	【外国語Ⅰ】 【外国語Ⅱ】	【外国語Ⅰ】 【外国語Ⅱ】	【外国語Ⅰ】 【外国語Ⅱ】	【外国語Ⅰ】 【外国語Ⅱ】	【外国語Ⅰ】 【外国語Ⅱ】	【外国語Ⅰ】 【外国語Ⅱ】	【外国語Ⅰ】 【外国語Ⅱ】
家庭総合	【家庭Ⅰ】 【家庭Ⅱ】	【家庭Ⅰ】 【家庭Ⅱ】	【家庭Ⅰ】 【家庭Ⅱ】	【家庭Ⅰ】 【家庭Ⅱ】	【家庭Ⅰ】 【家庭Ⅱ】	【家庭Ⅰ】 【家庭Ⅱ】	【家庭Ⅰ】 【家庭Ⅱ】	【家庭Ⅰ】 【家庭Ⅱ】	【家庭Ⅰ】 【家庭Ⅱ】	【家庭Ⅰ】 【家庭Ⅱ】	【家庭Ⅰ】 【家庭Ⅱ】	【家庭Ⅰ】 【家庭Ⅱ】
生活産業基礎	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】
生活産業情報	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】	【生活Ⅰ】 【生活Ⅱ】
専門家庭	【専門Ⅰ】 【専門Ⅱ】	【専門Ⅰ】 【専門Ⅱ】	【専門Ⅰ】 【専門Ⅱ】	【専門Ⅰ】 【専門Ⅱ】	【専門Ⅰ】 【専門Ⅱ】	【専門Ⅰ】 【専門Ⅱ】	【専門Ⅰ】 【専門Ⅱ】	【専門Ⅰ】 【専門Ⅱ】	【専門Ⅰ】 【専門Ⅱ】	【専門Ⅰ】 【専門Ⅱ】	【専門Ⅰ】 【専門Ⅱ】	【専門Ⅰ】 【専門Ⅱ】
デザイン※	【デザインⅠ】 【デザインⅡ】	【デザインⅠ】 【デザインⅡ】	【デザインⅠ】 【デザインⅡ】	【デザインⅠ】 【デザインⅡ】	【デザインⅠ】 【デザインⅡ】	【デザインⅠ】 【デザインⅡ】	【デザインⅠ】 【デザインⅡ】	【デザインⅠ】 【デザインⅡ】	【デザインⅠ】 【デザインⅡ】	【デザインⅠ】 【デザインⅡ】	【デザインⅠ】 【デザインⅡ】	【デザインⅠ】 【デザインⅡ】
学校行事等	【学校Ⅰ】 【学校Ⅱ】	【学校Ⅰ】 【学校Ⅱ】	【学校Ⅰ】 【学校Ⅱ】	【学校Ⅰ】 【学校Ⅱ】	【学校Ⅰ】 【学校Ⅱ】	【学校Ⅰ】 【学校Ⅱ】	【学校Ⅰ】 【学校Ⅱ】	【学校Ⅰ】 【学校Ⅱ】	【学校Ⅰ】 【学校Ⅱ】	【学校Ⅰ】 【学校Ⅱ】	【学校Ⅰ】 【学校Ⅱ】	【学校Ⅰ】 【学校Ⅱ】

※他にも各種講習会(認知症サポーター講座、テールマナー講座、外部施設訪問(保育園実習など)、各種ワークショップ、各種検定(検眼、食物調理、色彩、ペンネスト、文書、情報処理)なども随時実施。

第五章 生徒の活動

1 調理国際科・生活デザイン科の対外的活動

本校は学年6クラスのうち、調理国際科が1クラス、生活デザイン科が2クラス設置されている。調理国際科は、県下で唯一高校卒業と同時に調理師免許を取得できる男女共学の公立学校であり、生活デザイン科は、デザインファッション、情報、福祉・保育といった、家庭に関する幅広い分野を学習する。

実習授業が多いため班やグループを中心とした学習形態は週内に多くあり、普通科と比較して協同的な学習形態の導入は行いやすい。また、グループ内の対話は自然である。

両学科は、授業で身につけた主体的な学びを、校内から対外的な活動に目を向けて自己有用感を高めることに取り組んだ。

(1) 調理国際科の活動

ア 小学生料理教室

日時：平成29年6月11日(日)午前9時から午後2時まで

場所：特別教室棟第1調理室

内容：地元の小学生と接する機会を持ち地域の異校種との交流を図る。また、実習等で学習した調理技術を人に教え補助することで技術の向上を目指す。

参加者：岩津小学校の5、6年生43名

調理国際科第2、3学年23名

イ 八丁味噌料理対決

日時：平成29年10月4日(水)

午後1時から午後3時まで

場所：特別教室棟会食室等

内容：科目「生活産業基礎」の一環として地元の特産物「八丁味噌」を使ったアイデア料理を考案する。二人一組で料理を作り、本校職員や学校評議員にプレゼンテーションを行った。

参加者：調理国際科1年39名

採点者18名(本校職員、学校評議員、新聞社記者)



(2) 生活デザイン科の活動

ア 第44回岡崎市小中学校技術・家庭科作品展

日時：平成29年10月8日(日)

午前9時から午後3時まで

場所：岡崎市中心総合公園 武道場

内容：会場の一角に本校の学科紹介のコーナーを設けた。小中学生や来場した保護者を対象に、午前中は調理国際



科の実演を行い、午後は生活デザイン科の生徒が指導役となり、アクセサリー作りを体験してもらった。

参加者：調理国際科 15 名，生活デザイン科 9 名

イ 「セントレア アートキルトミュージアム」

日時：平成 30 年 3 月 3 日（土）より 1 年間（予定）

場所：中部国際空港「セントレア」 センターピアガーデン 1 F・2 F

内容：生活デザイン科で学んだ 3 年間の集大成として、第 3 学年全員による巨大キルト（縦 2.5m 横 2 m）の制作を行った。来日した外国の方々に日本の良さを伝えようと、一針一針に思いを込めて手縫いで作成した。

2 地域協働活動

本校は、家庭科の専門学科があることから、全国高等学校家庭クラブ連盟に加盟している。昨年度から全校生徒が加入し、調理国際科や生活デザイン科の生徒だけでなく普通科の生徒も多く家庭クラブの活動に参加した。本年度は、「人を助けること」「人と関わること」をテーマに、生徒が主体となる活動が盛んに行われた。

(1) 家庭クラブの活動

ア 花の植え替えボランティア（第 1 回）

日時：平成 29 年 5 月 23 日（火）

午後 1 時から午後 2 時まで

場所：校内

内容：中庭及び昇降口のプランターや花の植え替えと花壇の整備

参加者：51 名

イ 花の植え替えボランティア（第 2 回）

日時：平成 29 年 10 月 18 日（火）

午後 3 時 40 分から午後 4 時まで

場所：校内

内容：中庭及び昇降口のプランターや花壇の植え替えと花壇の整備

参加者：28 名

ウ 「真福の郷」ふくろう祭ボランティア活動

日時：平成 29 年 7 月 23 日（日）午後 3 時 10 分から午後 8 時まで

場所：社会福祉法人杏福会 特別養護老人ホーム「真福の郷」

内容：特別養護老人ホーム「真福の郷」を訪問し、入所者やデイサービス等利用者が参加するふくろう祭の手伝いを行った。

参加者：60 名

エ 「さくらレジデンス」納涼祭ボランティア活動

日時：平成 29 年 8 月 26 日（土）午前 11 時 30 分から午後 4 時 30 分まで

場所：特別養護老人ホーム「さくらレジデンス」

内容：特別養護老人ホーム「さくらレジデンス」を訪問し、入所者やデイサービス等のお年寄りの話し相手や、身の回りの世話をするとともに納涼祭



の準備と手伝いを行った。

参加者：15名

オ 北部地域福祉センター「笑話浪漫サロン」ボランティア活動

日時：平成29年10月7日（土）午前10時から午後4時30分まで

場所：岡崎市北部地域福祉センター

内容：北部地域福祉センターにて、岡崎女子大学の学生及び岩津中学校の生徒と合同で「笑話浪漫サロン」を実施し、訪れた子どもや、入所者の方との交流を図った。

参加者：9名

カ 岡崎女子大学文化祭での子どもとの交流会

日時：平成29年11月4日（土）午前9時30分から午後4時30分まで

場所：岡崎女子大学

内容：岡崎女子大学の文化祭に参加し、来校する幼児との交流の機会を設けることにより、保育士を希望する生徒と幼児との交流の機会とする。また、生活デザイン科課題研究「保育」講座を選択している生活デザイン科3年生の学習の発表の機会とした。

参加者：8名

キ 岡崎市商工フェアでのカレーパン販売ボランティア

日時：平成29年11月4日（土）午前9時30分から午後4時30分まで

場所：岡崎公園

内容：2017 岡崎城下家康公秋まつり・商工フェアにおいて、3年前に地元業者と協同で商品開発した「むらさき麦入りドライカレーパン」の販売ボランティアを行った。

参加者：6名

ク 「アルクオーレ」秋祭りボランティア活動

日時：平成29年11月5日（日）午前10時から正午まで

場所：特別養護老人ホーム「アルクオーレ」

内容：特別養護老人ホームを訪問し、入所者やデイサービス等利用者が参加する秋祭りの手伝いを行った。

参加者：8名

(2) 特別活動部の活動

ア 平成29年度地域清掃ボランティア

日時：平成29年6月30日（金）午後1時から午後2時まで

場所：学校周辺の通学路 4コース

内容：通学路を4コースに分担し、経路沿いにおける空き缶、ペットボトルの回収やゴミ拾いを行う予定を立てた。

参加者：雨天中止

イ なごみん横丁ボランティア

日時：平成29年8月8日（火）から11日（金）

場所：岡崎市北部医地域交流センター「なごみん」

内容：小学生を対象とした仮想の街作りを、なごみんスタッフとともに運営準備を行う。当日は子どもたちの活動の見守りや運営の補助を行った。

参加者：15名

ウ 平成29年度地域清掃ボランティア（再実施）

日時：平成29年10月17日（火）午後1時から午後2時まで

場所：学校周辺の通学路 4コース

内容：第1学期に同企画が雨天で実施できなかったことから、生徒から再実施の要望が出されたことを受けて企画したが、残念ながら2度目も雨天のため中止となった。

参加者：雨天中止

エ 五校交流会

日時：平成29年12月22日（金）午後1時から午後2時30分まで

場所：本校特別教室棟

内容：地域の異校種の学校と交流を行うことで、生徒が様々な体験を共有する場を設け、異校種間の双方の交流を通じて開かれた魅力ある学校づくりの推進を図るために実施した。また、家庭科専門学科を有する高等学校として、生徒に学習内容に関する知識・技能を生かす経験をさせることを目的とした。

参加者：岩津小, 岩津中, 岡崎豊学校生徒 96名 本校生徒 30名

3 部活動の活躍

(1) オーケストラ部

ア 北部まつり出張演奏

日時：平成29年9月18日（祝）

午後2時から午後2時45分

場所：北部地域福祉センター

内容：北部地域福祉センターで行われた北部まつりの午後の部で、オーケストラ部が出張演奏を行った。

参加者：オーケストラ部 35名



イ 特別養護老人ホーム出張演奏

日時：平成29年11月5日（日）

午後1時から午後1時45分

場所：第二・三やなぎ苑

内容：施設で行われた秋の「収穫祭」で出張演奏を行った。

参加者：オーケストラ部 35名

(2) 男女バレー部の活動

ア 愛知県立岡崎豊学校との交流練習

日時：平成29年11月7日（火）、14日（火）

場所：男子 岡崎豊学校体育館 女子 岩津高校体育館

内容：前年度は本校の体育館が耐震工事のため練習ができず、聾学校の体育館を借用して練習や合同練習を行った。本年度も引き続き交流を続けた結果、岡崎聾学校は東海地区聾学校バレーボール大会で優勝した。

参加者：男子バレー部 8名、女子バレー部 12名

4 生徒の活動成績

(1) 部活動成績

部活動名	大会名	成績
ライフル射撃部	第54回全国高等学校ライフル射撃競技選手権大会	3名出場
バレーボール部（女子）	愛知県高等学校バレーボール選手権大会 県大会	出場
野球部	第99回全国高校野球選手権愛知大会	4回戦
陸上部	平成29年度愛知県高等学校新人戦体育大会陸上競技西三河支部予選会	男子円盤投 3位 女子100H 6位 女子走幅跳 7位
卓球部	愛知県高等学校新人体育大会 愛知県大会	出場（女子）
	一万人卓球大会岡崎市民大会	女子個人 3位
バドミントン部	第47回岡崎市民バドミントン選手権大会	女子個人 3位
ソフトボール部	西三選手権大会	3位
オーケストラ部	第41回全国高等学校総合文化祭広島大会	8名出場
演劇部	西三河第I地区大会	優秀舞台衣装賞 優秀音響効果賞
美術部	中部二科展デザイン部門	入賞 2名
		入選 3名

(2) デザイン・美術作品における上位入賞者

主催	コンテスト名	入賞生徒	賞
日本デザイン文化協会	NDK Fresh Contest 2015	生活デザイン科	作品制作部門 優秀賞 1名 デザイン画部門 入賞 3名
トライデントデザイン専門学校	トライデント マンガ・イラストコンテスト'16	美術部	イラスト部門 入選 1名 佳作 2名
名古屋文化短期大学	ナゴヤファッション&ビューティー コレクション'17 joint fashion show 高校生の部	生活デザイン科	B部門ブロンズ アワード 1名 B部門ブロンズ アワード 1名 A部門入選 1名
トライデントデザイン	トライデント	生活デザイン科	入選 1名

専門学校	インテリアデザインコンテスト 2016		トライデント賞 3名
愛知県健康福祉部	愛知県エイズ予防強化週間ポスター	普通科 調理国際科 生活デザイン科	一席1名 三席1名 佳作5名
愛知県選挙管理委員会	明るい選挙啓発ポスター	調理国際科 生活デザイン科	特選3名 入選3名 佳作3名

(3) 調理・食品コンテストにおける上位入賞者

主催	コンテスト名	入賞生徒	賞
名古屋文理大学短期大学部	平成 29 年度第 3 回高校生スイーツコンテスト	調理国際科	グランプリ 1 名 名古屋市教育委員会賞 1 名
公益社団法人日本調理師会	第 7 回全国子どものための愛情弁当コンテスト	生活デザイン科	最優秀賞 1 名 優秀賞 1 名
愛知県牛乳普及協会	牛乳・乳製品利用料理コンクール愛知県大会	調理国際科	最優秀賞・県知事賞 1 名 佳作 8 名
名古屋文化短期大学	第 14 回高校生クッキングコンテストスイーツ部門	調理国際科	最優秀賞 1 名
	第 14 回高校生クッキングコンテストお弁当部門	生活デザイン科	入賞 3 名
貝印株式会社	第 10 回「貝印スイーツ甲子園」東日本ブロック予選大会	調理国際科	出場 3 名 (1 組)

(4) その他

主催	コンテスト名	入賞生徒	賞
伊藤園	第 28 回伊藤園お〜いお茶新俳句大賞	普通科	佳作特別賞 1 名 佳作 2 名
安城市環境部	エコキャップ甲子園	生徒会	エコキャップ賞
浦和大学	第 1 回おもちゃコンテスト	生活デザイン科	佳作 1 名

(5) 新聞等メディアに取り上げられた生徒の活躍

日付	メディア	タイトル等	対象者
5/2	中日新聞	岩津高生 2 人 中部二科展入賞 能森さん井川さん県内高校生初	美術部 3 年
5/4	東海愛知新聞	県立岩津高美術部 中部二科展でW入賞	美術部 3 年

		能森さんと井川さんのデザイン	
6/13	中日新聞	楽しく一緒にピザ作り 岡崎 岩津高生が児童に指導	調理国際科
7/1	岡崎ホームニュース	岩津高校美術部 中部二科展デザイン部門 3年生5人が入選	生活デザイン科
7/2	中日新聞	岩津, 中盤に突き放す	野球部
7/12	中日新聞	服飾デザイン作品披露 名古屋「フレッシュコンテスト」	生活デザイン科
7/16	中日新聞	岩津が逃げ切る	野球部
7/19	中日新聞	岩津が投打かみ合う	野球部
7/19	朝日新聞	直球とスライダー 好調の中村抑える 岩津・土肥君	野球部
7/22	中日新聞	桜丘 投手戦制す	野球部
7/22	朝日新聞	投手戦投げ抜いた 岩津・土肥君	野球部
7/22	東海愛知新聞	井川さんがグランプリ 県立岩津高デザイン科 NDKフレッシュコンテスト	生活デザイン科
9/9	岡崎ホームニュース	NDKフレッシュコンテスト 井川さんグランプリ 鷹見さん優秀賞	生活デザイン科
9/22	MICS ネットワーク	岩津高校美術部 中部二科展入選者取材	美術部
10/5	東海愛知新聞	八丁味噌料理対決 岡崎 岩津高1年生が挑戦	国際調理科1年
10/9	中日新聞	岡崎女子大生らが高齢者と触れ合い 「笑話浪漫サロン」	家庭クラブ
10/28	岡崎ホームニュース	八丁味噌で料理対決 岩津高校 調理国際科1年生39人	調理国際科1年
12/23	中日新聞	岩津の4校が触れ合い	生徒会 調理国際科 生活デザイン科
1/20	FMおかざき	メガヒットワールド TOP10 美術部の出演	美術部3名

第六章 おわりに

1 ある日のこと

この秋、ソフトボール部が大会で3位を獲得した。21チームが参加した地方の小さな大会とはいえ、何十年もの間賞状にはほど遠かったチームが、である。

ある日、練習を終えて仲良く下校する2年生部員に聞いてみた。「昨年と今年で何か変わったことがある？」と。「練習メニューを自分たちで考えるようになった」「試合後の月曜はミーティングを行うようにした」と部員たちが明るく答えてくれた。

チームを指導してきた教員は本校が初任、勤め始めて5年目になる。ソフトボールの経験も指導実績もない。それでも、時間を惜しまず部員と練習を共にしてきた。それでも、これまで大会1勝が精一杯であった。彼は国語科、この研究の教科の中心となって2年目になる。

教員が指導方法を変えたのか、生徒が工夫したのかは聞かなかった。ただ、教員も生徒も主体的な学びをキーワードに、学びに変化が生まれていることを実感した。

2 研究を終えて

本研究では、「社会に貢献する生徒の育成」を目指してきた。教科のみならず、ホームルームや学校行事、家庭クラブなどに研究の場を広げていくことで、生徒自身が「主体的」「対話的」に学ぶことを、少しずつではあるが身につけていると思われる。そして、「主体的」な学びと「対話的」な学びを結び付けることで、生徒たちの関心・意欲と表現力の向上につながることで、研究の様々な場で見受けられた。

研究を進めるにあたって、国語、数学、英語の3教科をはじめ2年間にわたり大学教授による指導法研究の支援を得られたことは誠に大きい。ワークショップを通して主体的な学びに向けての課題を、全教員が共有することができた。研究授業等では、教科担当者が個別に支援や相談を受けたり、また当日の授業を見ながら直後にアドバイスを得たりすることができた。

平成26,27年度に研究指定を受けていた愛知県立加茂丘高等学校には、研究支援員として本校研修会へ教員を派遣していただいた。また、本校からは授業参観に多くの教員を受け入れていただいた。その他、県内外を問わず、他校を訪問して授業参観を行った。学校の取り組みを聞いたりすることは、教員の大きな刺激になった。

この度の研究機会がなければ、新学習指導要領の柱の一つである、主体的・対話的な活動に対する教員の意識は高まらなかったであろう。そして、早くから授業改善を実践し、研究の中心になった若手教員が、新学習指導要領に沿った教育活動の中心となって活躍することを期待する。大きな転換期を迎えた今、これを一時の研究とせず今後のカリキュラムマネジメントに繋げていきたい。



